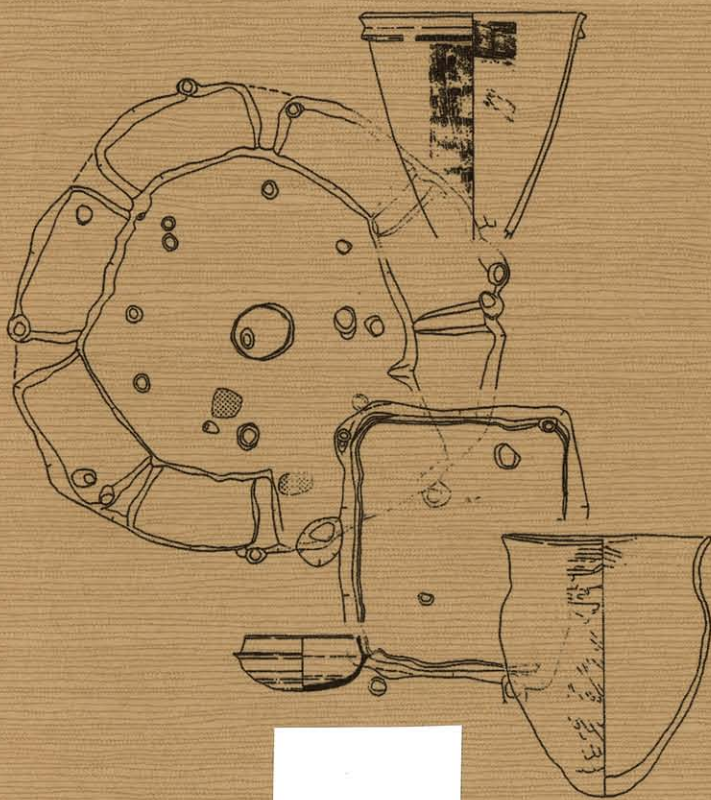


北浦町文化財発掘調査報告書 第1集

なか の うち
中 野 内 遺 跡

古江地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1997年3月

宮崎県東臼杵郡北浦町教育委員会

凡 例

1. 本書は古江地区団体営土地改良総合整備事業に伴う宮崎県東臼杵郡北浦町所在、中野内（なかのうち）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集は、宮崎県教育委員会主任主事 吉本正典が行った。作成図面はすべて吉本が製図した。
3. 整理作業に関して、宮崎県埋蔵文化財センター整理作業員の協力を得た。
4. 遺構の番号は、検出順に付している。「竪穴」としたものは、ほとんどが竪穴住居であると考えられるが、柱穴の位置が不明確な場合もあるため、慎重を期す意味でそのように称している。
5. 図中の方位は磁北を基にしている。ただし第2図のみは座標北を示している。
6. 文中、表中の土器の器種名は、「～形土器」を省略し、単に「甕」、「壺」という様に表記した。
7. 遺物に関する詳細は観察表を参照されたい。土器の色調、器面調整については表／裏の順に記している。また径を復元した個体については、残存部分の割合（1／○）を示している。
8. 土器に関して、大分市教育委員会 坪根伸也氏より諸々のご教示をいただいた。
9. 調査記録類、遺物は、北浦町教育委員会が保管している。

目 次

第 I 章	はじめに	1
第 1 節	調査に至る経緯	1
第 2 節	調査組織	1
第 3 節	遺跡の位置と環境	3
第 II 章	調査の記録	7
第 1 節	概 要	7
第 2 節	層 序	7
第 3 節	弥生時代の遺構・遺物	9
第 4 節	古墳時代の遺構・遺物	27
第 III 章	むすびにかえて	62
報告書抄録	64
図 版	65

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

古江地区の団体営土地改良総合整備事業は、約14.1haを対象に平成2年度から実施されている。その中にはかねてより遺物が採集され、存在が周知されていた中野内遺跡が含まれていた。そのため、平成3年11月に県教育委員会による試掘調査が実施され、遺構が良好に残ることが確認された。

それを受けて、北浦町教育委員会では事業部局と遺跡保護についての協議を行ったが、計画変更が困難な箇所については、北浦町教育委員会が主体となって発掘調査を実施し、記録を残すこととなった。

発掘調査は、県教育委員会の職員が担当した。

第 2 節 調査組織

調査主体は前述の通り北浦町教育委員会である。調査組織は以下の通り。

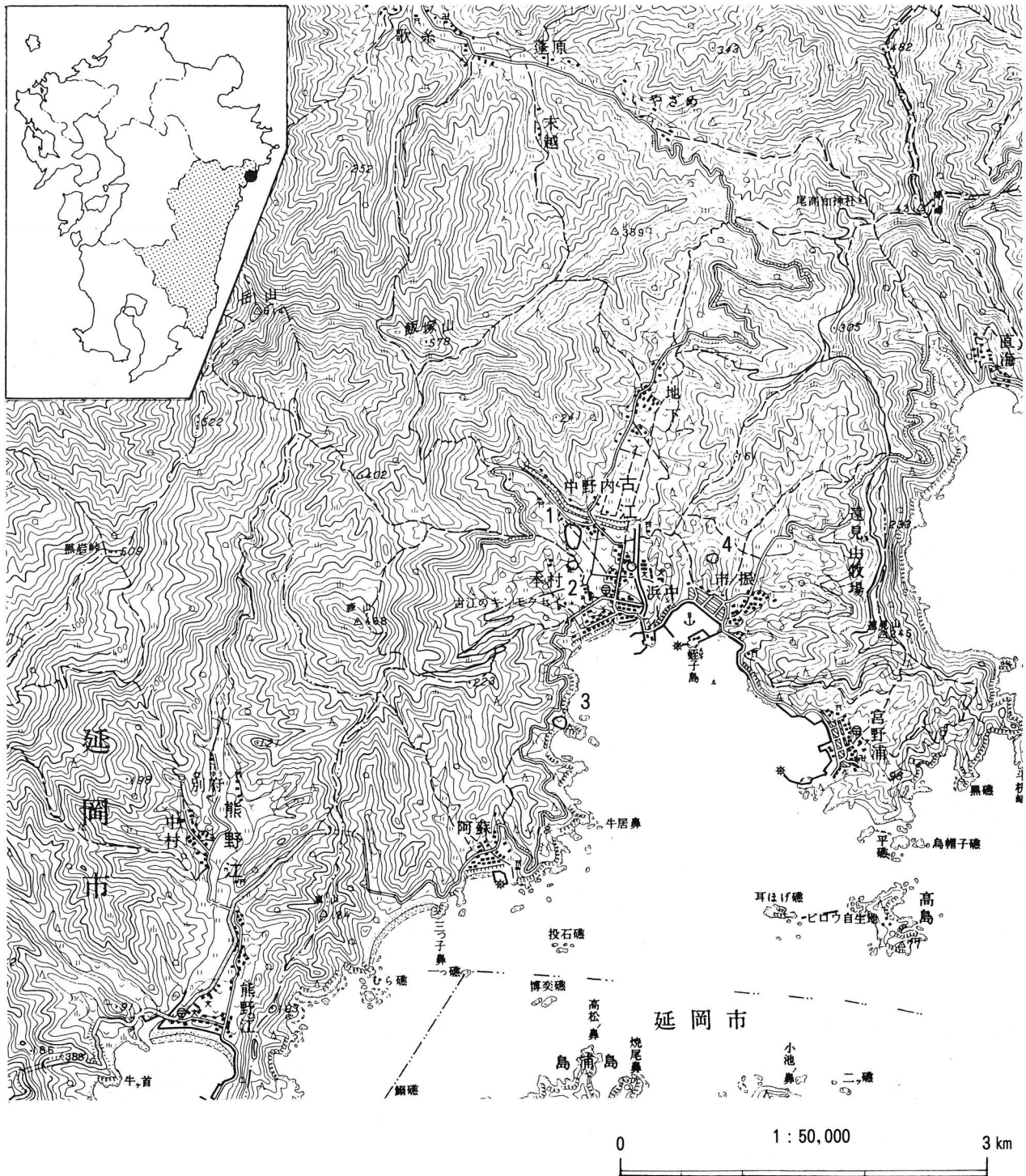
(発掘調査・平成4年度)

教 育 長	星川 豊
社会教育課長	大野 光裕 (平成4年10月まで)
	中田 忠俊 (平成4年11月から)
課 長 補 佐	河野 基 (庶務担当者)
発掘調査担当	吉本 正典 (宮崎県教育委員会文化課主事)

整理作業は、遺物洗浄のみ現地で行い、その後の作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。

(報告書作成・平成9年度)

教 育 長	吉田 清光
社会教育課長	小島 栄
課 長 補 佐	木原 一成
報告書作成者	吉本 正典 (宮崎県教育委員会文化課主任主事)



- 1 中野内遺跡 2 本村遺跡 3 見張台遺跡 4 市振遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺地形（5万分の1地形図より）

第3節 遺跡の位置と環境

中野内遺跡は、宮崎県東臼杵郡北浦町字中野内に所在する。

北浦町は宮崎県の最北東端に位置し、東は日向灘に面する。北は大分県南海部郡蒲江町に、西は東臼杵郡北川町に、南は延岡市に接する。海岸線沿いの地区は、比較的温暖で、雨量も多い。明治初期に踏査・編纂された平部喬南の『日向地誌』には、「陸運便ナラスト雖も海運ノ便アリ水田稀少ト雖も薪窮乏シカラス且魚鰕ノ利アリ生計頗ル易シ」¹⁾とあり、山海の資源に富む当地の生活の一端を垣間見ることができる。

同町付近の海岸線を車で通ると、岬は険しく海に迫り、峠を越えると湾に向けて下り、湾奥には漁港と集落が営まれている、という典型的なリアス式海岸の景観を見ることができる。

遺跡の所在する古江地区もまた、湾奥の比較的大きな漁港の背後に街区・集落が形成されており、役場、金融機関等も置かれる同町の中核地区となっている。その背後には、なだらかな傾斜を示す扇状地状の微高地が広がり、水田や畑地となっている。

中野内遺跡は、そのような扇状地状地形の最も奥（頂）の部分に立地する。標高は約18mを測る。北～西側には谷筋が入り、氾濫原を形成している。また調査区南側では今回の発掘調査により埋没谷が検出されており、本遺跡は条件の良い微高地上に営まれていることがわかる。

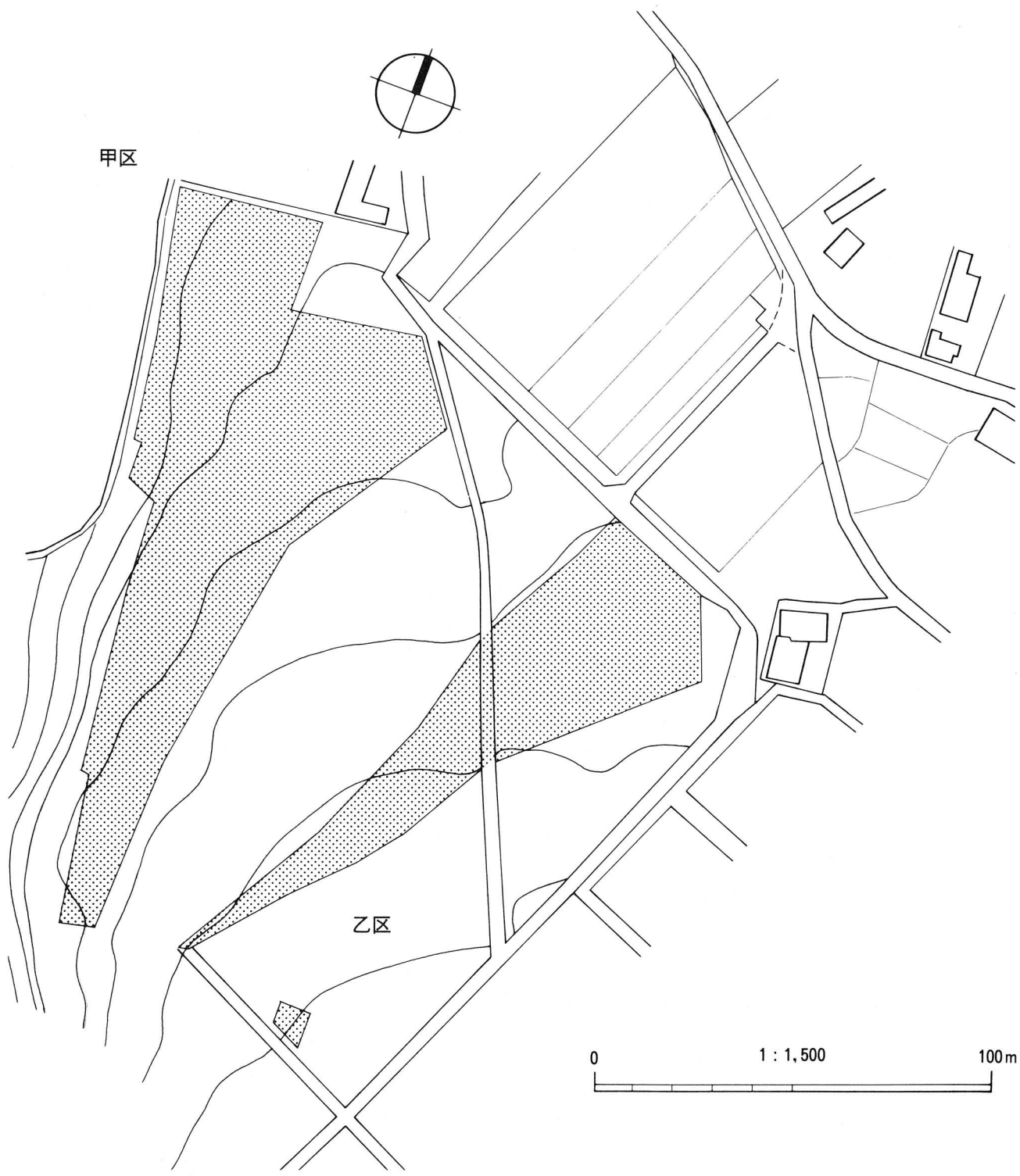
付近で現在知られている遺跡としては、大字古江字本村の本村遺跡（縄文時代後期、中世）、同じく大字古江字ハイの見張台遺跡（古墳時代）などがある。それらは文化庁発行の『全国遺跡地図』²⁾に記載されている。

同町南隣の延岡市熊野江地区の海岸近くでは、箱式石棺の分布が確認されており、5基については県指定史跡に指定されている（南浦村古墳）ほか、1基については昭和54年（1979）に宮崎県教育委員会による発掘調査が行われた³⁾。棺上には石が積まれており、主体部は千枚岩により構成されていた。棺内には人骨も遺存していた。

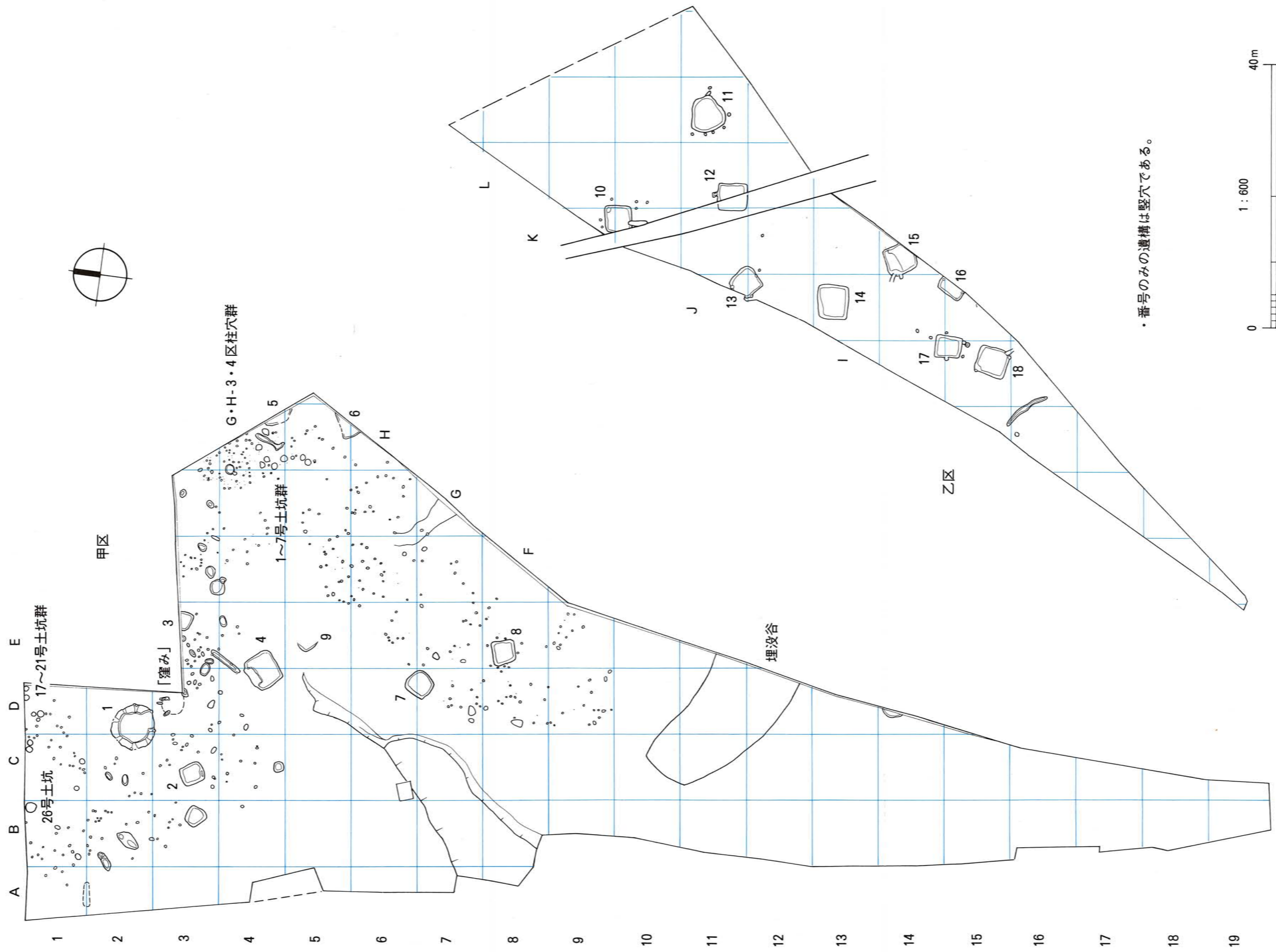
その他、内陸部の三川内地区の字市尾内と字中水流には、不明瞭ながら中世の城館跡が存在した可能性があるという⁴⁾。

（註）

- 1) 平部喬南 『日向地誌』 1978 新潮社（復刻本）
- 2) 文化庁 『全国遺跡地図－宮崎県－』 1977
- 3) 石川恒太郎 「熊野江積石塚第6号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』22
1980 宮崎県教育委員会
- 4) 現在進められている、宮崎県中近世城館跡緊急分布調査の成果による。



第2図 調査区的位置



第3図 遺跡分布図

第Ⅱ章 調査の記録

第1節 概要

発掘調査は工事により影響を受ける範囲を対象に、平成4年7月13日から同年11月18日までの期間にわたって実施された。調査面積は10,360㎡である。

調査区は細長い2つのブロックに分かれるが、これは、文化層が影響を受ける範囲のみを調査対象地としたためである。ここでは便宜的に甲区(6,900㎡)、乙区(3,460㎡)と称している。

発掘調査に際しては、調査区北西端に任意の0点を定め、主軸N-5°-Wの10mグリッドを組み、西から東にA・B・C…、北から南に1・2・3…と区名を名付け、その組み合わせで地区を表示することとした。

調査では、まず重機を使用して表土を剥ぎ、谷状地形部に残る遺物包含層(Ⅱ層・後述)の掘り下げを行った後、基本的にはアカホヤ層(Ⅲ層)上面で遺構の検出を行っていった。調査区の中では、A~D-5~8区を中心に耕作の影響による削平箇所が見られ、文化層の遺存しないところもあったが、概ね試掘調査の所見からも想定された通り、遺跡は良好な状態にあることが判明した。

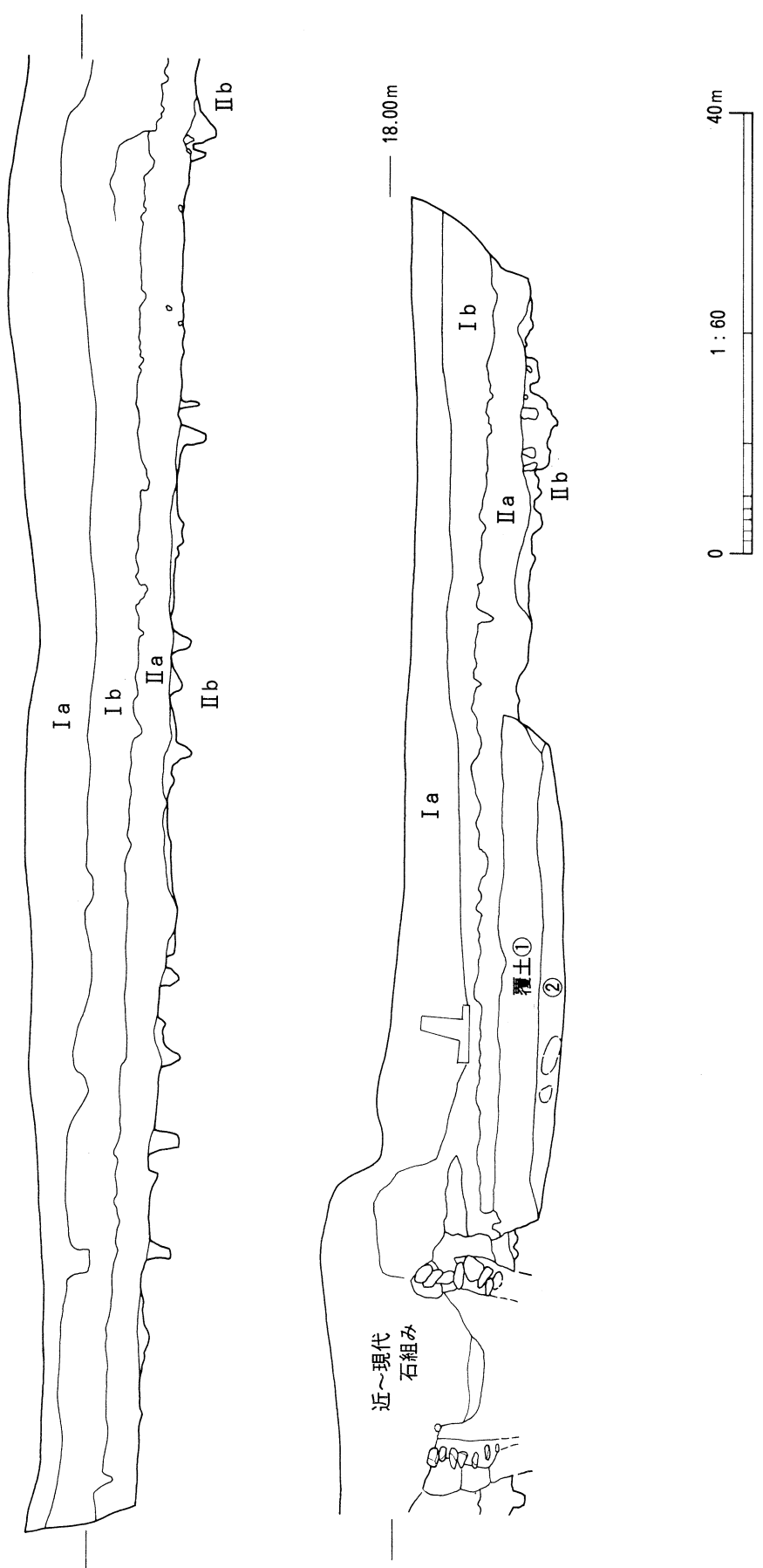
検出遺構は、弥生時代中期末~後期初頭の竪穴5基、古墳時代中期~後期の竪穴13基、土坑等であり、遺構中、および包含層中から多量の遺物が出土している。

第2節 層序

基本層序は以下の通りである。

- I 層 表土、耕作土。しまりのない褐色土。色調により上下2層に細分できる。
下層は旧耕作土か。攪乱された遺物が含まれる。
- Ⅱ a層 黒褐色土。弥生時代~古墳時代の遺物を包含する。特に谷状地形部に厚く堆積する。
b層 「アカホヤ」のブロックを多く含む。
- Ⅲ 層 橙色を呈する。「アカホヤ」と通称される、鬼界カルデラ起源の火山灰土。
場所によっては腐植化し、黒ずんだ色あいを呈する。無遺物層。
- Ⅳ 層 暗褐色の硬質土。小礫を含む。遺物は見られなかった。

ところどころ、洪水、小規模な土石流によると見られる砂礫のブロックが上記の層序をえぐるように堆積している。基盤は河成の小礫・砂層である。



第4図 基本土層図(甲区東壁)

第3節 弥生時代の遺構・遺物

A区の北端近くで中期末～後期初頭の遺構が検出された。花卉状住居（円形基調の間仕切り住居）1基〔1号堅穴〕、ベッド状遺構付き方形堅穴1基〔4号堅穴〕、方形小堅穴2基〔2号・3号堅穴〕、円形土坑〔26号土坑など〕があり、花卉状住居を中心に半径約20mの範囲におさまることから、同時期の所産と仮定するならば、一つの単位となる遺構群と考えられる。

5号堅穴といくつかの円形土坑は西に離れて存在するため、上記の仮定が正しければ、別の集合体に属するものと位置付けられよう。

遺物の中では、在地土器に加えて外来系の土器が出土している点が興味深い。特に遺構出土の資料は、当地の編年整備を進める上で重要であるのみならず、クロス・デーティングの検討材料として一定の位置を占めると考えられる。

また、C～E-2～4区付近では、現在の編年観で縄文時代晩期、弥生時代前期～中期前半に属すると見られる土器が一定量出土している。ただし、D-3区でわずかな地山面の窪みが認められたものの、明瞭な遺構は検出できなかった。該期の土器は1号～4号堅穴の覆土中からも出土していることから、近くに文化層が存在していたが、後の時期の遺構構築の影響を受け、破壊されたものと推測される。

以下、遺構と出土遺物を記述していく。縄文時代晩期の土器を含む包含層出土遺物は、末尾で一括して扱う。

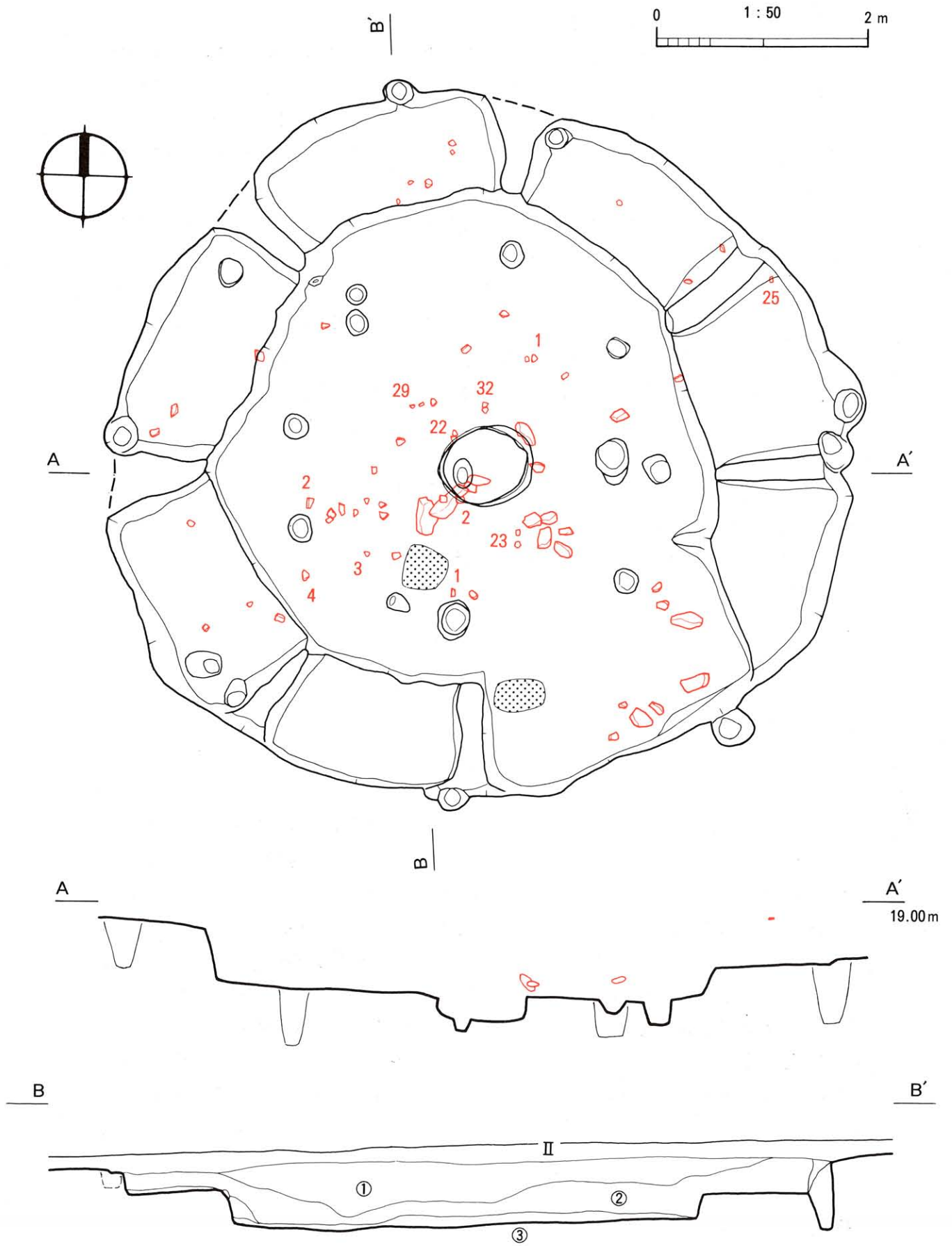
1号堅穴

いわゆる花卉状住居跡。径約7mの円形堅穴住居の壁際を幅約1.2m程掘り残して、ベッド状遺構を構成し、その上面に7箇所の間仕切り土壁を（やはり掘り残して）築く。床面の中央にはさらに一段掘り凹めた箇所（中央土坑）がある。すなわち①遺構構築面→②間仕切り土壁上面→③ベッド状遺構上面→④床面→⑤中央土坑の順にレベルが下がる。間仕切り土壁の高さは約10～30cm。ベッド状遺構上面と床面の高低差は約20～30cm。中央土坑の深さは約25cm。ただし、南東側のみは変則的にベッド状遺構が途切れ、床面と同一の高さで壁際に至る。床面には8箇所の柱穴が見られ、それらが主柱穴となると見られる。うち2箇所には複数のPitが存在するため、建て替えか拡張が行われた可能性がある。柱穴の床面からの深さは28～52cm。さらに、外周の壁際にも柱穴が認められる。補助的な柱穴と考えられる。中央土坑内には炭化物が多く含まれるが、明瞭な火熱の痕跡は認められなかった。火処と見られる箇所は、その南西側の網掛け部分で、わずかな凹部に炭化物が堆積している。また南側の覆土中にも焼土らしきものが見られたが、性格等は不明である。

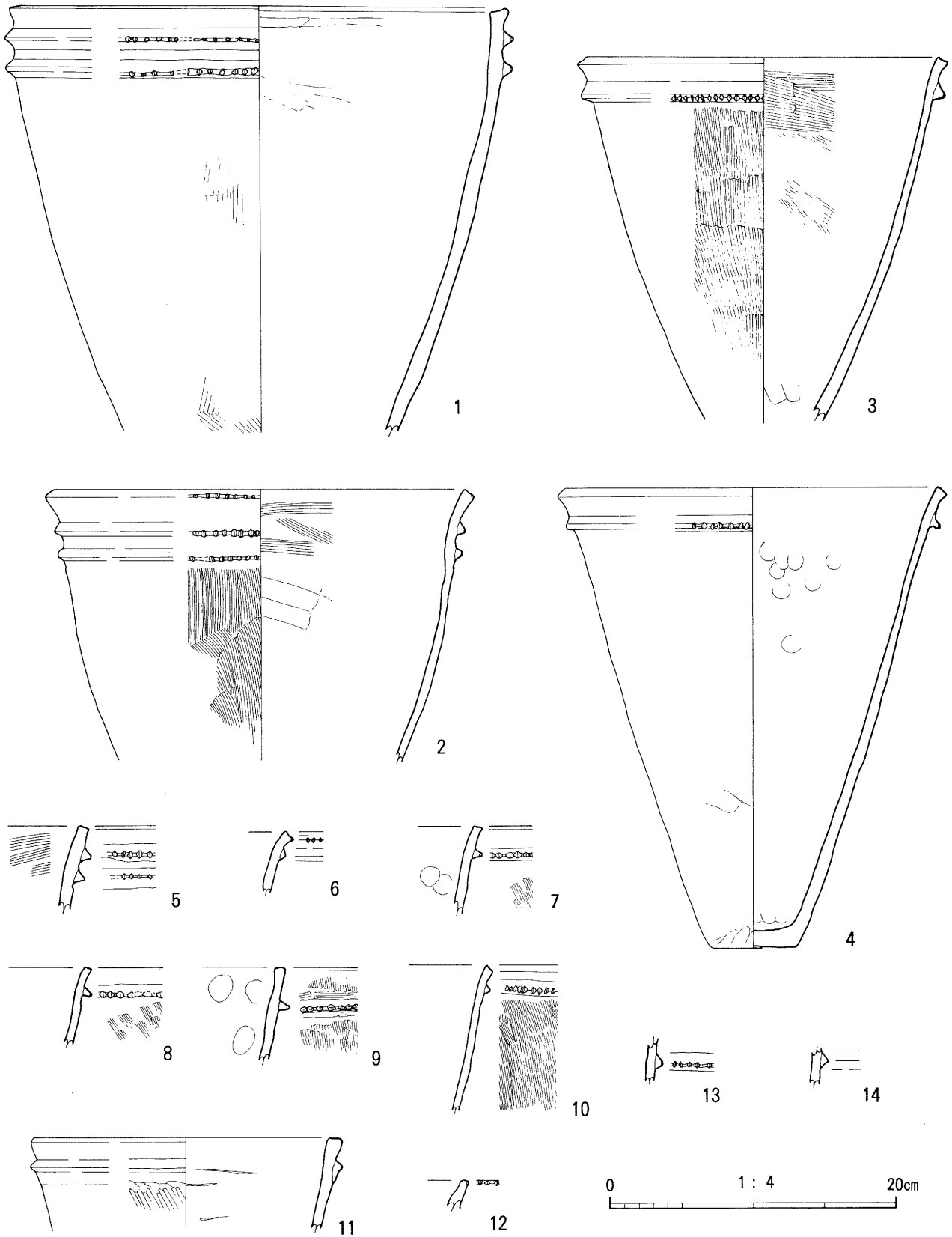
覆土はⅡ層土を基調とする黒色土系のもので、①はⅡ層よりもやや黒味が強くなり、②は「アカホヤ」パミス含有率が高くなり、そのためやや茶色味が増す。③は「アカホヤ」ブロックが混入する。

1号堅穴出土遺物

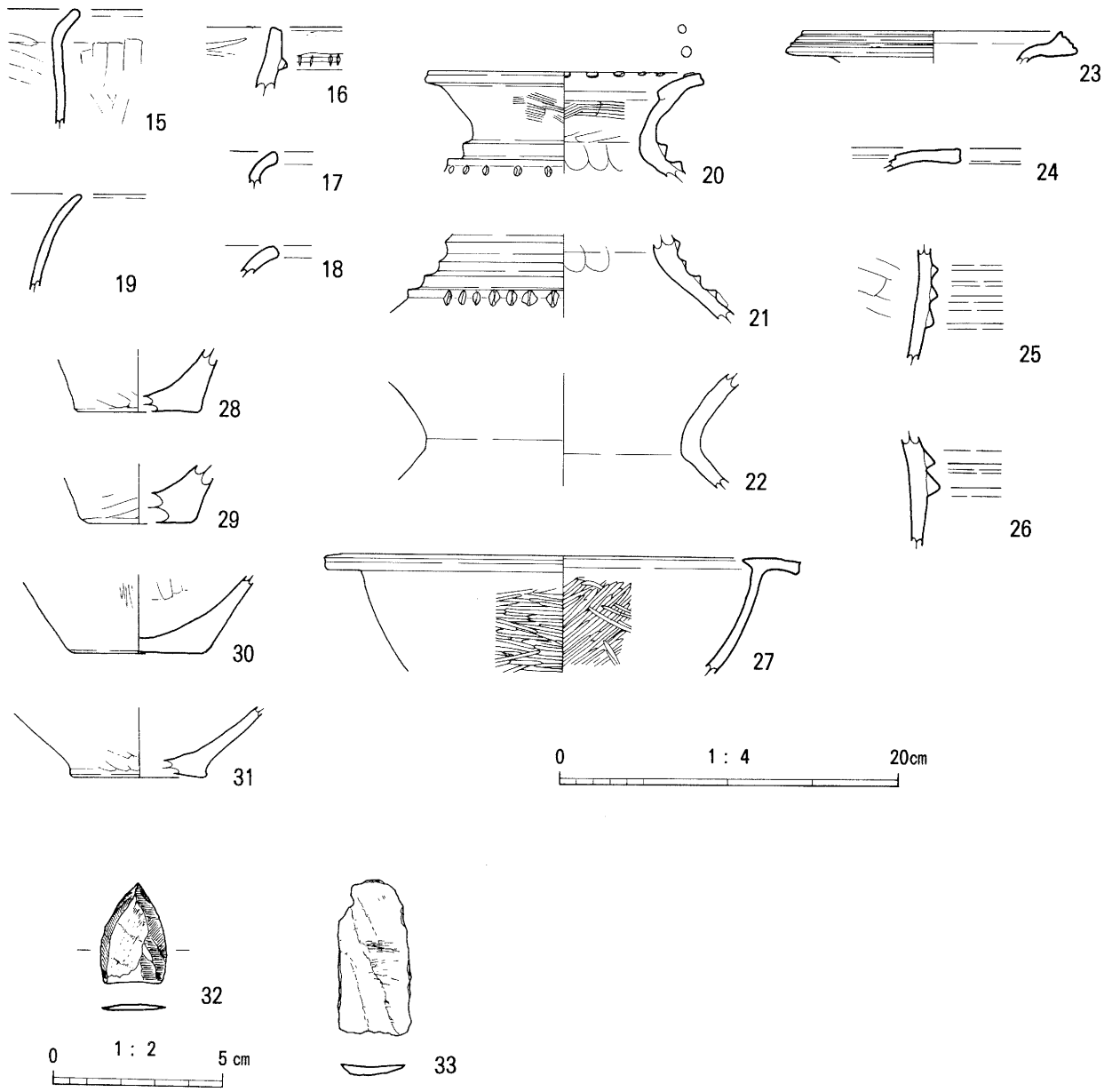
遺物は覆土上～中層より多く出土している。また遺物に混じって自然礫が多数見られたが、まとまりはなく、あたかも投棄されたような状態であった。



第5图 1号竖穴



第6图 1号竖穴出土遗物(1)



第7图 1号竖穴出土遗物(2)

1～10は口縁部の下位に突帯を巡らせる甕。突帯には刻みを施しており、2・6などは口縁端部の肥厚部分にも刻目を付ける。突帯が多条となる場合でも、同時ではなく個別に刻みを施す。1のようにやや胴部が張るものと、4のように張らない形状のものがある。また2などは口縁部がわずかに外反する。15は口縁部が「く」字形に屈曲する甕。16は口縁部下に刻目突帯を巡らせる甕であるが、若干内湾し、器壁も厚いなど、他の突帯甕とは様相が異なる。

20・21は壺の口縁部～肩部。いずれも頸部に断面三角形の突帯を巡らせ、楕円形の浮文を施す。20は口縁部内面（上面）にも円形浮文を施す。

23は口唇部に凹線文を施す壺である。この種の土器の凹線文としてはやや粗めの印象を与えている。胎土中に白色、半透明の混入物が認められる。

24は須久式系の広口壺か。内面には段が形成される。27は高杯で、外面は丹念なミガキ調整が施される。

32は磨製石鏃、33は磨製石鏃の未製品と見られるもので、わずかに擦痕が認められる。

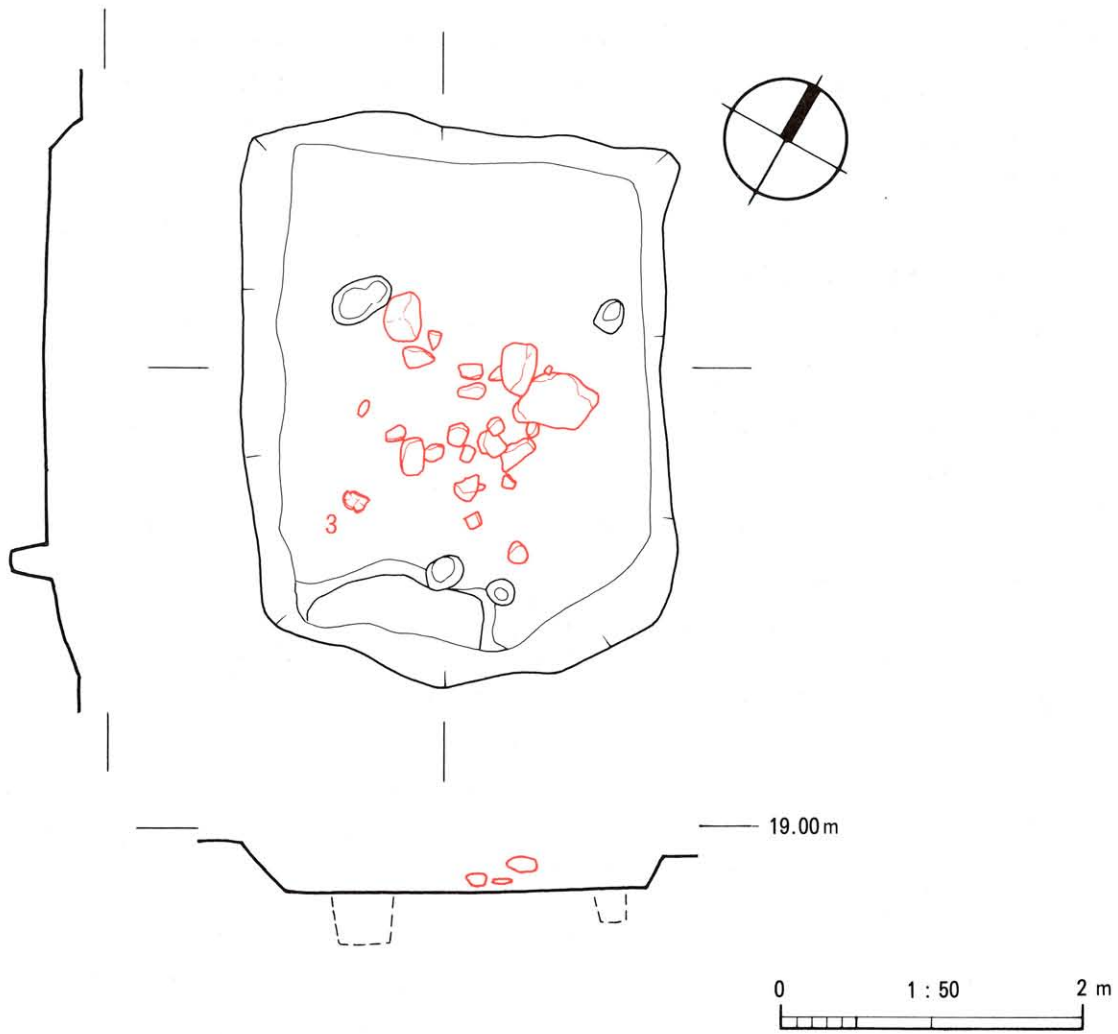
1	甕 ハケ 赤褐／橙 1/3	18	甕 ヨコナデ 橙・淡橙
2	甕 ハケ 灰褐 1/4	19	壺 ナデ にぶい橙／灰黄褐
3	甕 ハケ 橙／にぶい橙 1/3	20	壺 ナデ 橙／淡橙 1/2
4	甕 ハケ 橙／褐灰 1/3	21	壺 ヨコナデ／ナデ 橙・黄橙 1/2
5	甕 ハケ 黄橙	22	壺 ナデ 浅黄橙／灰黄 1/2
6	甕 ナデ にぶい橙	23	壺 ヨコナデ にぶい橙・灰褐 1/6
7	甕 ハケ 褐灰／灰黄褐	24	壺 ナデ にぶい橙／にぶい黄橙
8	甕 ハケ 浅黄	25	甕 ヨコナデ／ナデ 黄橙・灰褐
9	甕 ハケ 橙・灰褐／黄橙	26	壺？ ヨコナデ／ナデ にぶい橙
10	甕 ハケ 褐灰・灰褐	27	高杯 ミガキ 褐・赤褐 1/6
11	甕 ミガキ状ナデ／ナデ黄橙 1/6	28	甕 工具ナデ／ナデ 橙／黄橙
12	甕 ナデ にぶい褐／にぶい橙	29	甕 工具ナデ／ナデ にぶい黄橙
13	甕 ナデ にぶい橙	30	壺 工具ナデ／ナデ 橙
14	甕 ナデ にぶい赤褐	31	壺 工具ナデ／ナデ 灰黄褐・橙
15	甕 工具ナデ 灰黄褐／にぶい橙	32	石鏃 赤紫色頁岩製 重1.5 g
16	甕 ナデ 灰黄褐／灰黒	33	石鏃未製品 粘板岩製 重5.8 g
17	甕 ナデ 淡橙		

2号竪穴

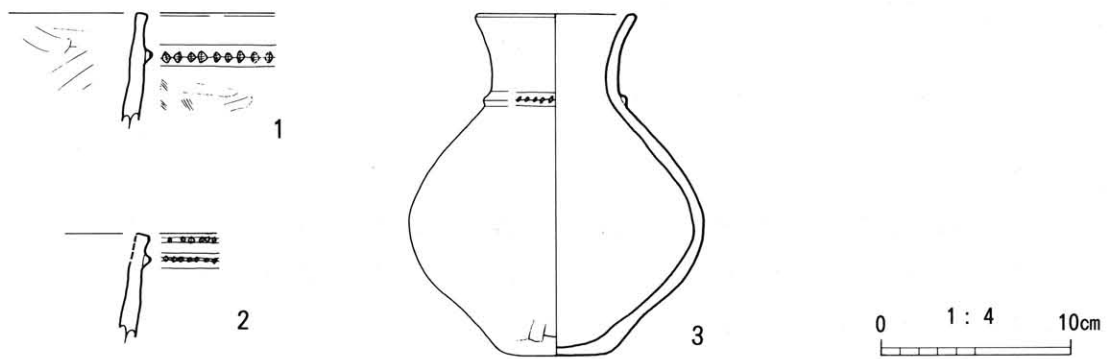
3.9m×2.8mの小形の方形竪穴。検出面からの深さは約30cm。壁面は直ではなく、なだらかに立ち上がる。南側壁沿いに地山掘り残しによるベッド状遺構が形成されている。床面には柱穴らしきpitが3基認められる。

覆土はⅡ層土を基調とする黒色土系のものである。

遺物は床面からやや浮いた位置より出土している。またほぼ中央部に、1号竪穴同様、礫が多数認められた。



第8図 2号竖穴



第9図 2号竖穴出土遺物

1・2は甕。口縁部下位に刻目突帯を巡らせる。2は口縁端部にも刻みを施す。
3は完形の小形壺で、頸部に一条の刻目突帯を巡らせる。

1	甕 工具ナデ 灰褐/灰黄褐	3	壺 ナデ 褐灰/黄橙 1/1
2	甕 工具ナデ/ナデ 橙		

3号竪穴

北側は調査区外となる。そのため全容は判明しないが、2号竪穴同様、小形の方形竪穴と見られる。一辺長は東西方向で約2.8m。検出面からの深さは約20cm。壁面の立ち上がりは、やはり2号竪穴同様なだらかである。南東部床面には深さ約40cmのPitが1基ある。床面は地山面となり、貼床などの痕跡は認められない。

覆土はⅡ層土基調の黒褐色土で、「アカホヤ」パミスを多く含む。

ほぼ中央部と推測される位置に、横たわった状態の甕が1個体出土している(1)。底部を欠くが、口縁部から胴部にかけて、全周が完全な状態で遺存していた。ただし、横転していたため、土圧でつぶれる形となっていた。その周囲には焼土(赤色粒、炭化物を多く含む)が堆積しており、また小礫も多く見られた。焼土や小礫は、土器の内部にも入り込んでいた。

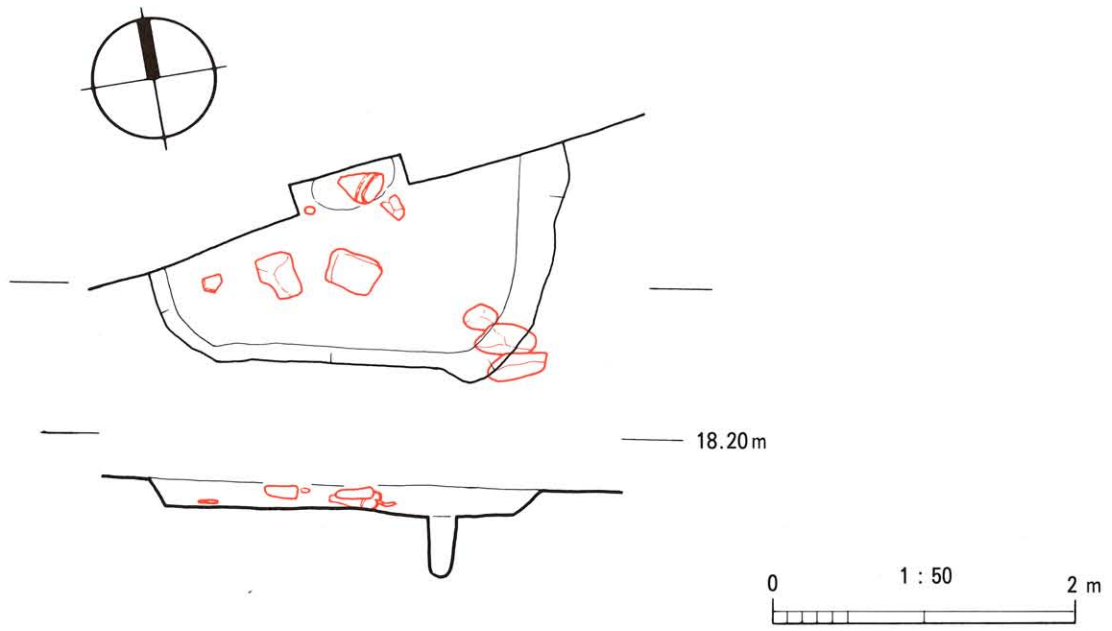
1以外の遺物は、多くが床面よりやや浮いた位置で出土している。なお、ここでも大きな礫が多数認められた。

1～5が口縁部下位に刻目突帯を巡らせる甕で、1が前述のように焼土中に在ったものである。口縁端部の外面にも刻みを施す。胴部の遺存する甕は、いずれも外面に細かいハケ目が残る。

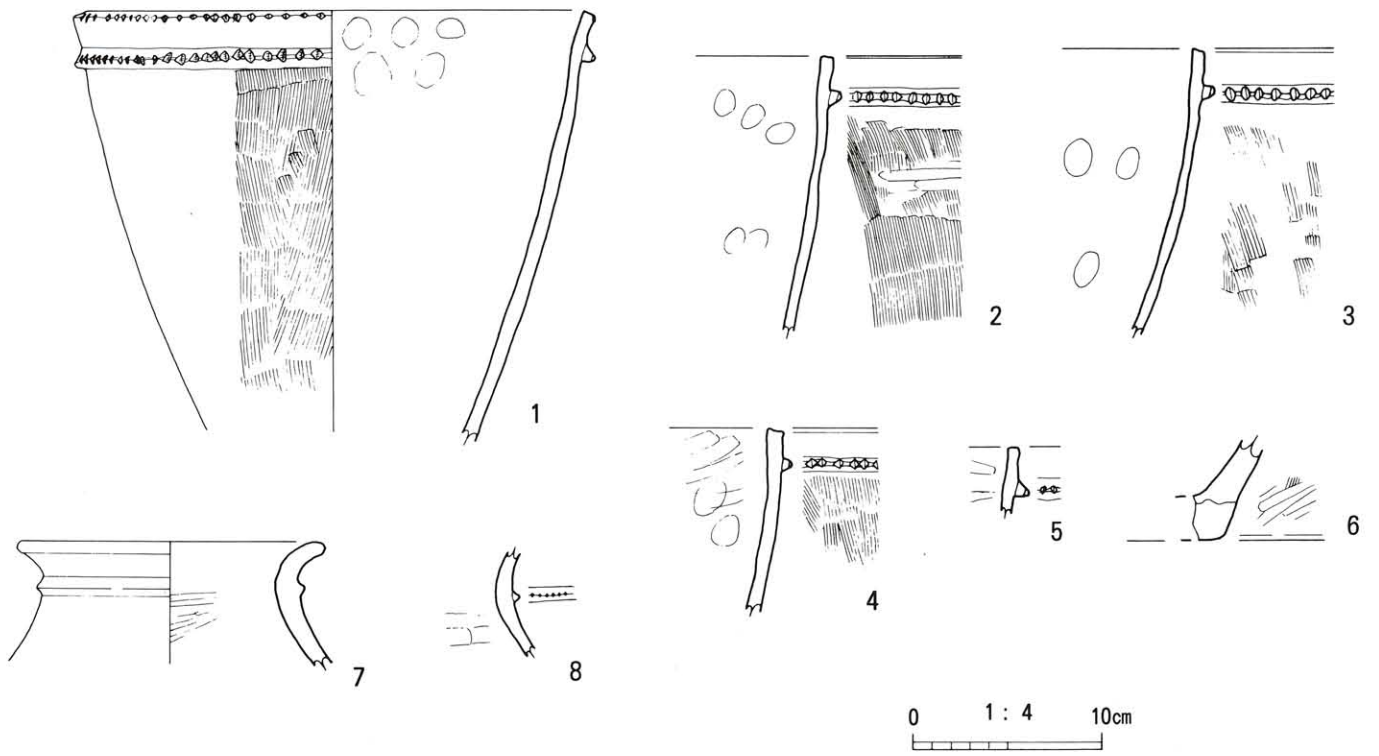
6は甕の底部か。

7・8は壺の口縁～頸部で、頸部に1条の突帯を巡らせる。8の突帯には細かい刻みが施される。

1	甕 ハケ/ナデ スス附着 橙/灰褐 1/1	5	甕 ナデ(風化) 明黄褐
2	甕 ハケ/ナデ 橙	6	甕 ハケ/ナデ 橙/赤褐
3	甕 ハケ/ナデ 橙/灰褐	7	壺 ナデ 橙 1/4
4	甕 ハケ/ナデ 灰褐/明黄褐	8	壺 ナデ にぶい橙



第10图 3号竖穴



第11图 3号竖穴出土遺物

4号竪穴

D・E-5区に位置する。1号・2号・3号竪穴とこの4号竪穴を結ぶと、長方形を形つくる。ただし、遺構主軸は必ずしも一致しない。

5.2m×4.8mの、比較的規模の大きな方形竪穴である。検出面から掘り込み底面までの深さは約20～30cmである。北側の壁沿いには、地山掘り残しによるベッド状遺構が形成されている。このベッド状の高まりは、北東側でコーナーを描いて突出する形となっているが、むしろ、住居の平面形からすると突出壁があるような形状となっており、1号竪穴のような花卉状住居との関連が指摘できる。

ベッド状遺構部分および床面のレベルの地山はⅢ層（アカホヤ層）で、床面には、「アカホヤ」ブロック混土による貼床が施されている。床面のほぼ中央部には浅い土坑があり、覆土中に炭化物が多量含まれていた。

床面にはPitが6基認められるが、うちベッド状遺構の南西隅近くにある1基は浅く、主柱穴たりえないであろう。基本的には4本主柱穴となると見られるが、そうすると若干偏った配置となる。

覆土はⅡ層土基調の黒褐色土で、柱穴部分はやや粘性が高い。

遺物は4を除き、ほとんどが覆土上部から出土している。土器の破片としてまとまっているのも4のみで、細片が圧倒的に多い。縄文時代晩期土器など、前時期の土器の破片も目立つ。また床面よりやや浮いた位置で、大きなもので長径60cm大の礫が多数出土している。特に床面中央付近に集中している。ベッド状遺構部分で、特に遺構の性格を示すような遺物は出土していない。

1は口縁部が「く」字形に屈曲する甕。外面にススが付着している。

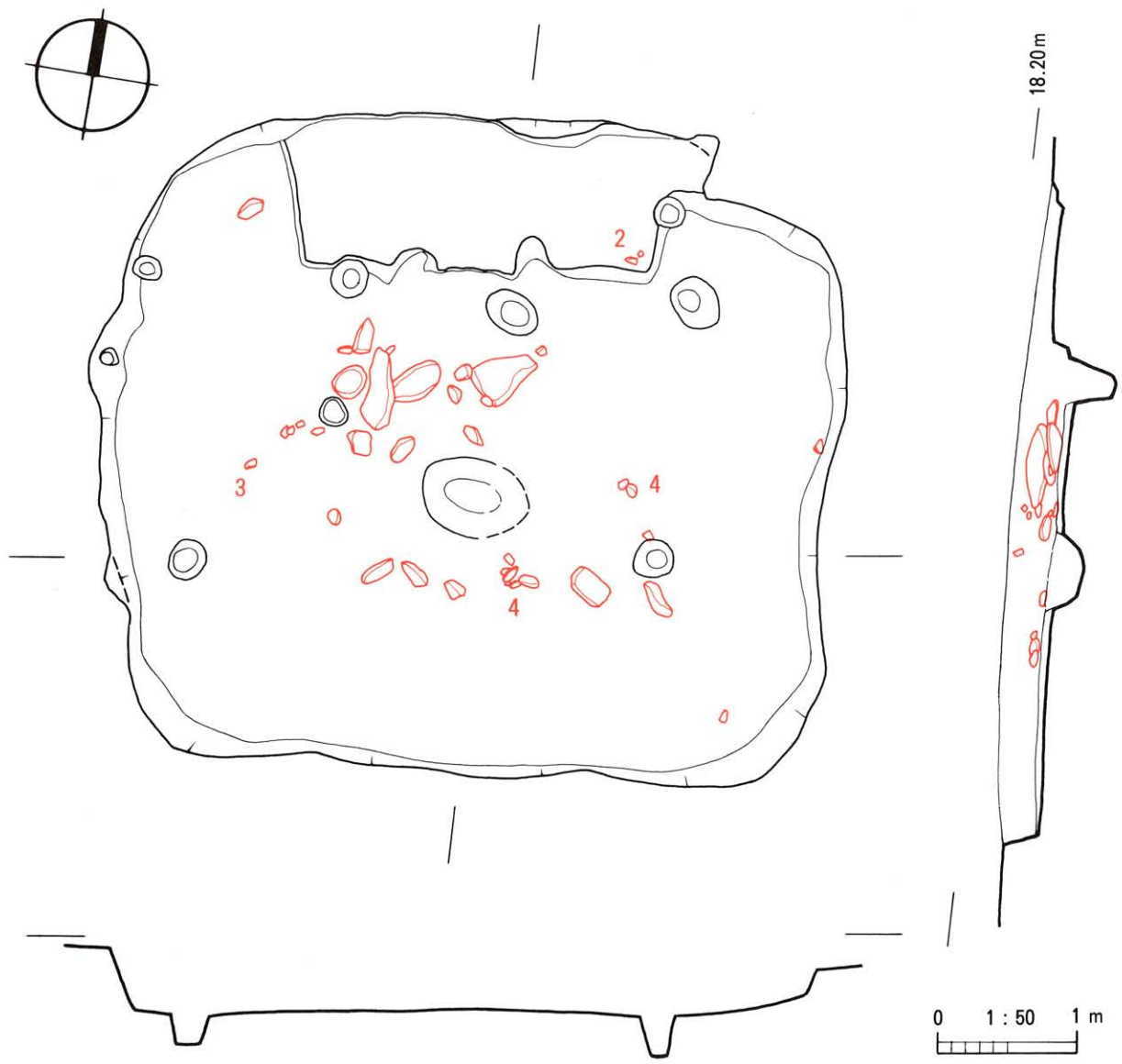
2は鋤先状を呈する壺の口縁部。3は口唇部に凹線文を施す壺。胎土中に白色の混入物が認められる。この「凹線文土器」は、1号竪穴出土のものを含め、胎土・焼成が明らかに他の土器と異なる。4は壺の胴部～底部。ナデ消されていてあまり明瞭でないが、ハケ目も残る。

1	甕 ナデ スス付着 にぶい黄橙/灰褐 1/8	3	壺 ヨコナデ 褐灰
		4	壺 ナデ(黒斑) 灰黄褐/明黄褐 1/1
2	壺 ナデ 黒褐/にぶい黄褐		

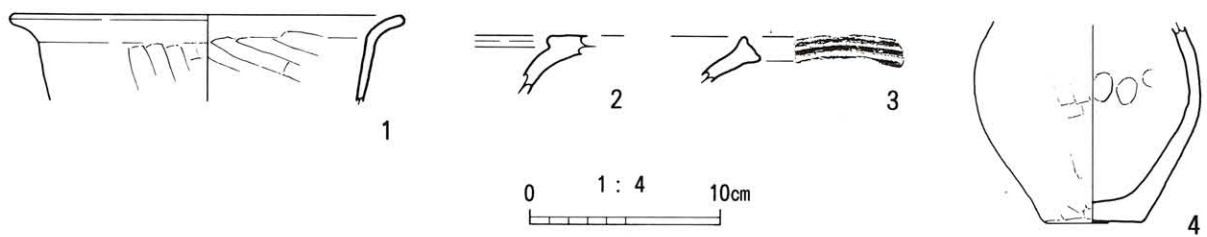
5号竪穴

甲区の北東端、調査区壁面近くで検出。大部分は調査区外にのびる。さらに南西側コーナー付近は層位攪乱の影響を受ける。柱穴等は明瞭でない。

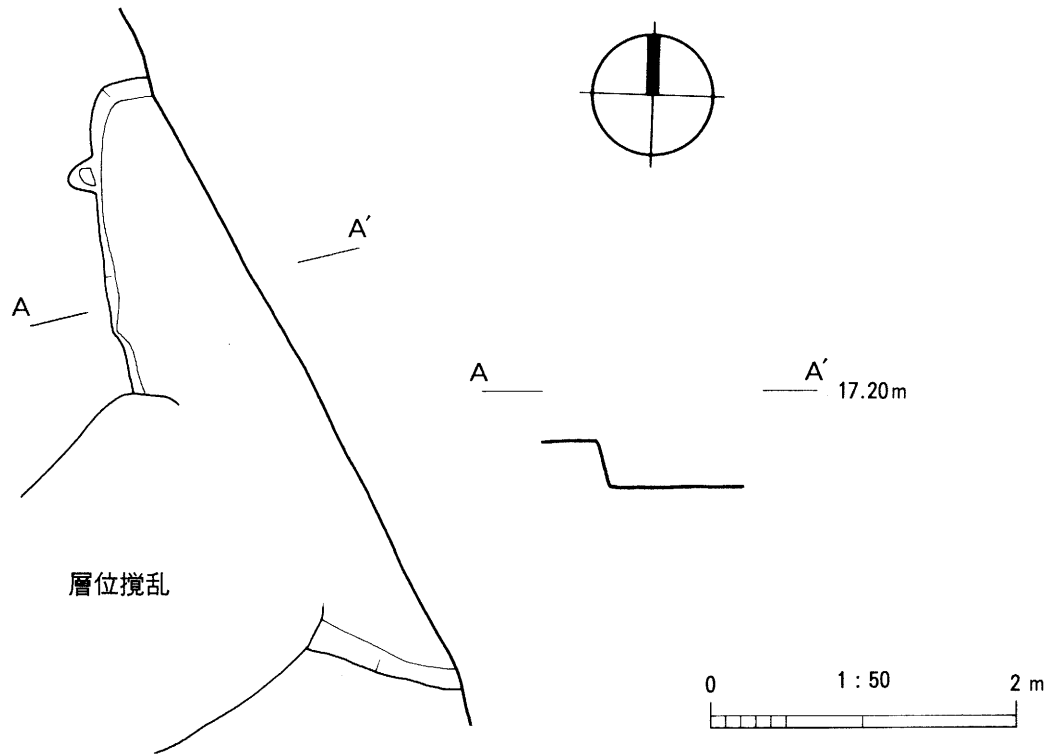
当初は、所属時代・時期が判らなかったが、遺物整理の結果、弥生時代に属すると判断できた。ただし、出土土器は小破片のみであり、平面形を含めて不明な点が多い。



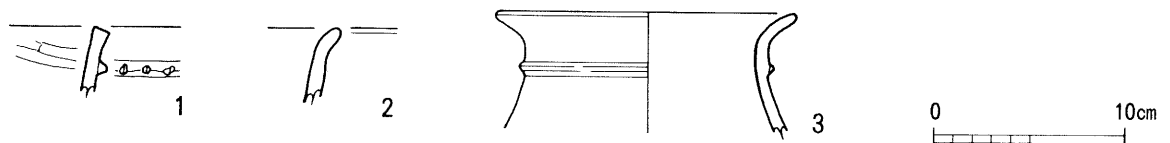
第12図 4号竖穴



第13図 4号竖穴出土遺物



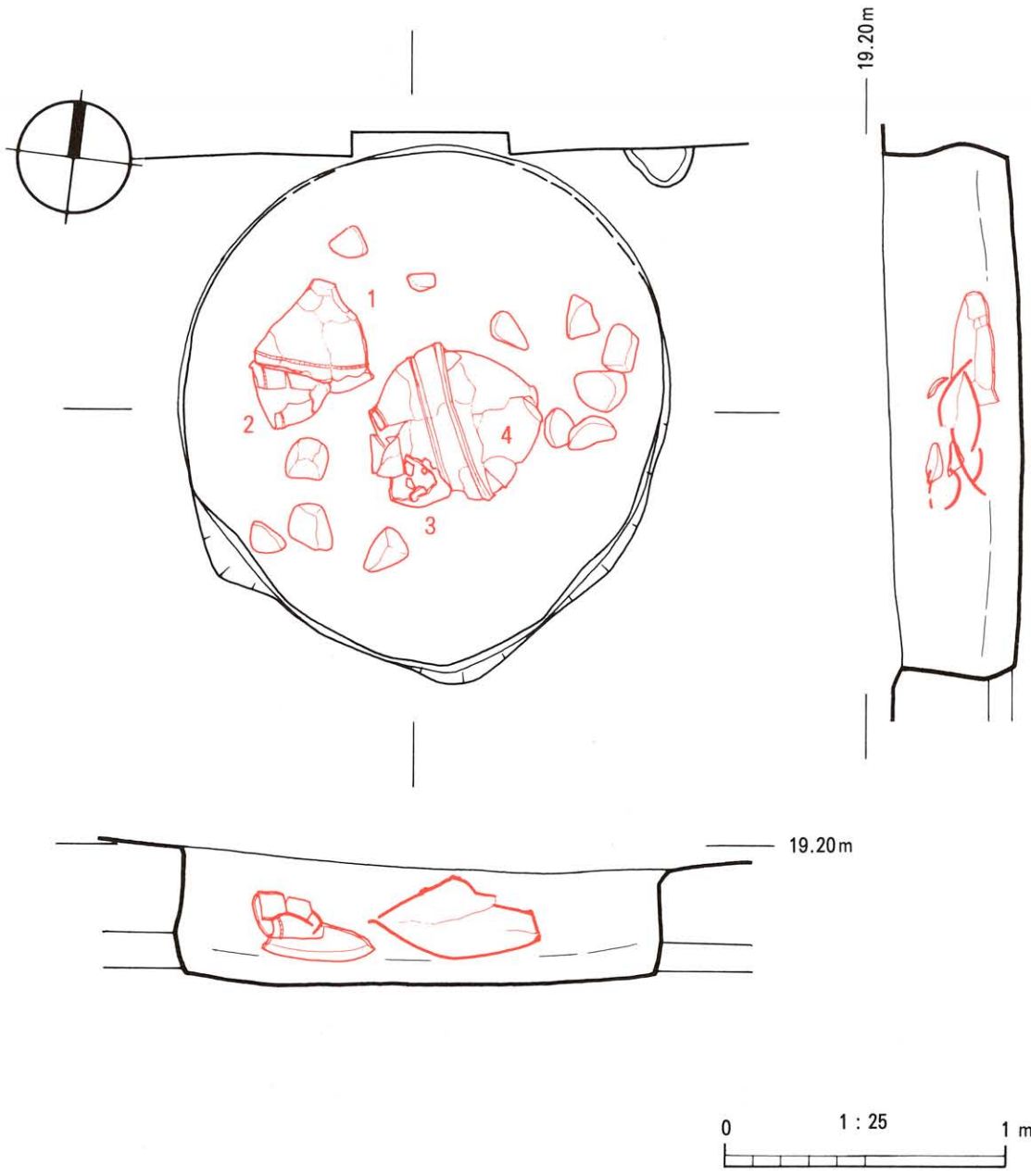
第14図 5号 豎 穴



第15図 5号 豎 穴 出 土 遺 物

1は突帯甕。2はにぶく屈曲する甕の口縁部。3は頸部に一条の突帯を巡らせる壺。

1	甕 ナデ 橙	3	ナデ 黄橙/橙 1/5
2	甕 ヨコナデ にぶい褐/にぶい橙		



第16图 26号土坑

26号土坑

甲区の北端で検出された円形の土坑である。まとまった4個体の土器が出土しており、それらは重要な一括遺物と位置づけられる。

その西側には、図化していないが、数基より成る土坑群がある（第3図17号～21号土坑群）。それらは遺物が出土していないため、所属時期が判然としないが、26号土坑と同様の形態であることから、同時期の所産である可能性が高い。またH-5・6区付近にも円形の土坑群（1～7号土坑群）があるが、これも所属時期が判然としない。

径は南北1.8m、東西1.7m、検出面からの深さは40cm～45cmを測る。断面を見ると、わずかながら間口よりも底面（下方）が広がる。いわゆるフラスコ状とまでは言えないが、それに近い形状となる。基盤の礫層まで掘り込まれている。

覆土はⅡ層土基調の黒色土で、やや粘性が高い。わずかに炭化物を含む。底面近くには「アカホヤ」のブロックが多く見られる。このため、上部は崩落した可能性もあり、元の断面形はより典型的なフラスコ状であったのかも知れない。

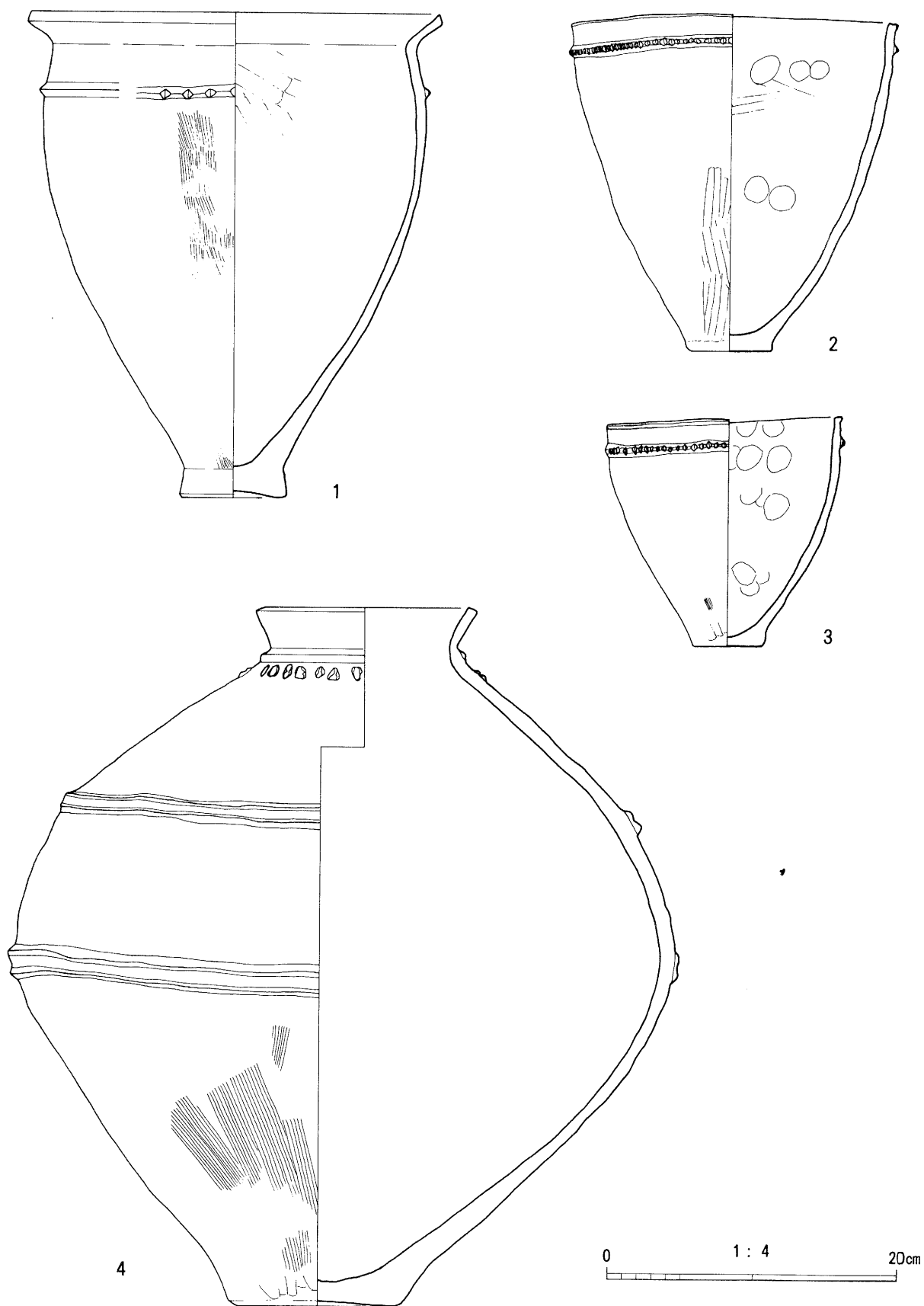
26号土坑出土遺物

遺物は前述の通り一括埋没と認定できるもので、甕3個体、壺1個体が横たわった状態で出土している。1と2の上部には礫が多く見られた。礫はその他のところでも、覆土の上層から下層までまんべんなく出土している。

1は口縁部が「く」字形に屈曲する甕。胴上部に刻目突帯を巡らせる。2・3は口縁部下位に刻目突帯を巡らせる甕で、3は小形のものである。

4は平底の壺。口縁部の立ち上がりは短い。頸部には楕円形の浮文が付される。また胴上部と中位に、にぶい断面「M」字形の突帯を2条巡らせる。

1	甕 ナデ/工具ナデ 浅黄橙/にぶい褐 1/1	3	甕 ミガキ状ナデ/ナデ 橙・灰褐/ にぶい橙 1/1
2	甕 ミガキ状ナデ/ナデ にぶい赤褐色/ 黄褐 1/1	4	壺 ハケ/ナデ 浅黄・黄橙/にぶい黄橙 1/1



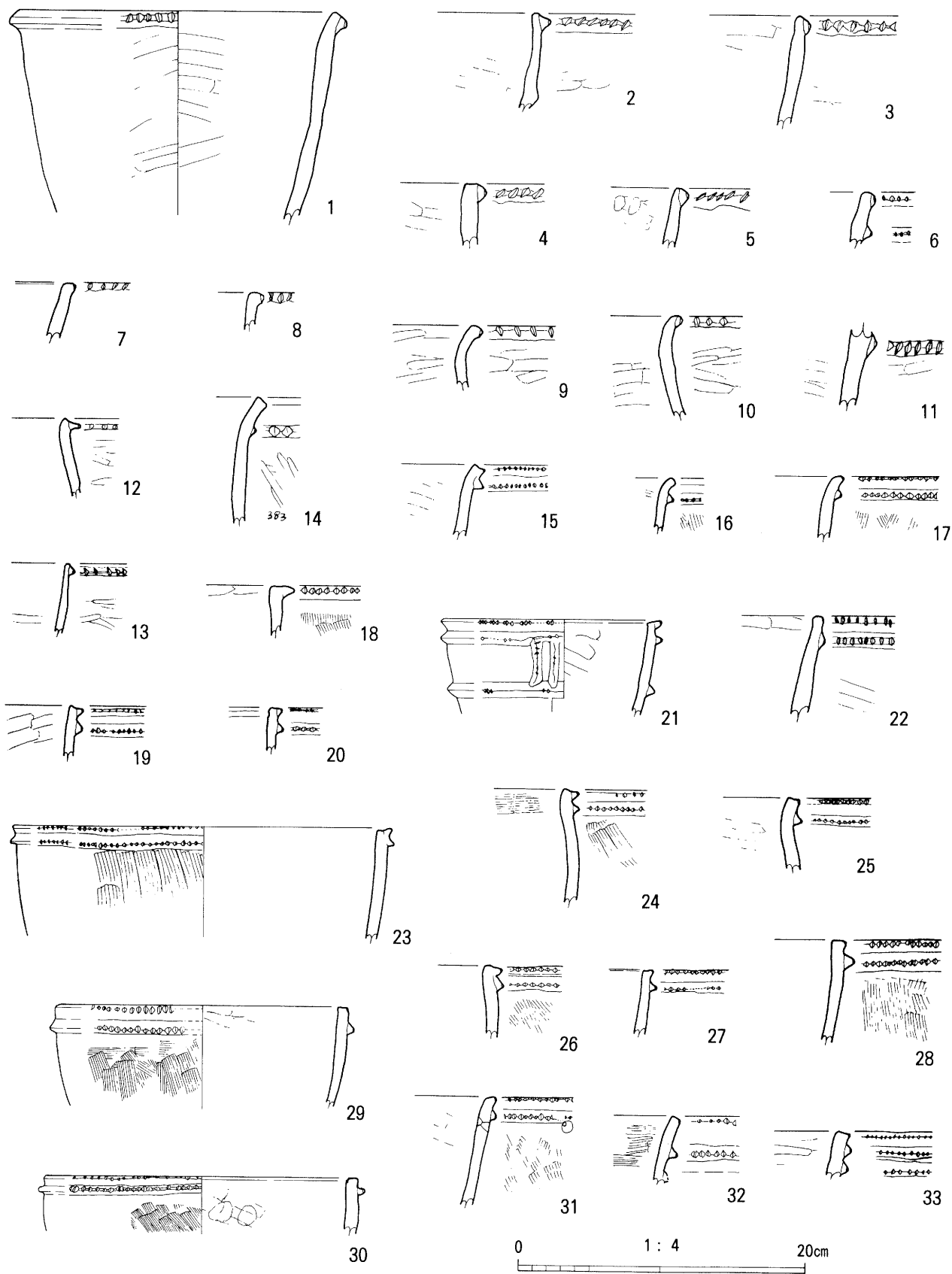
第17图 26号土坑出土遺物

包含層出土遺物

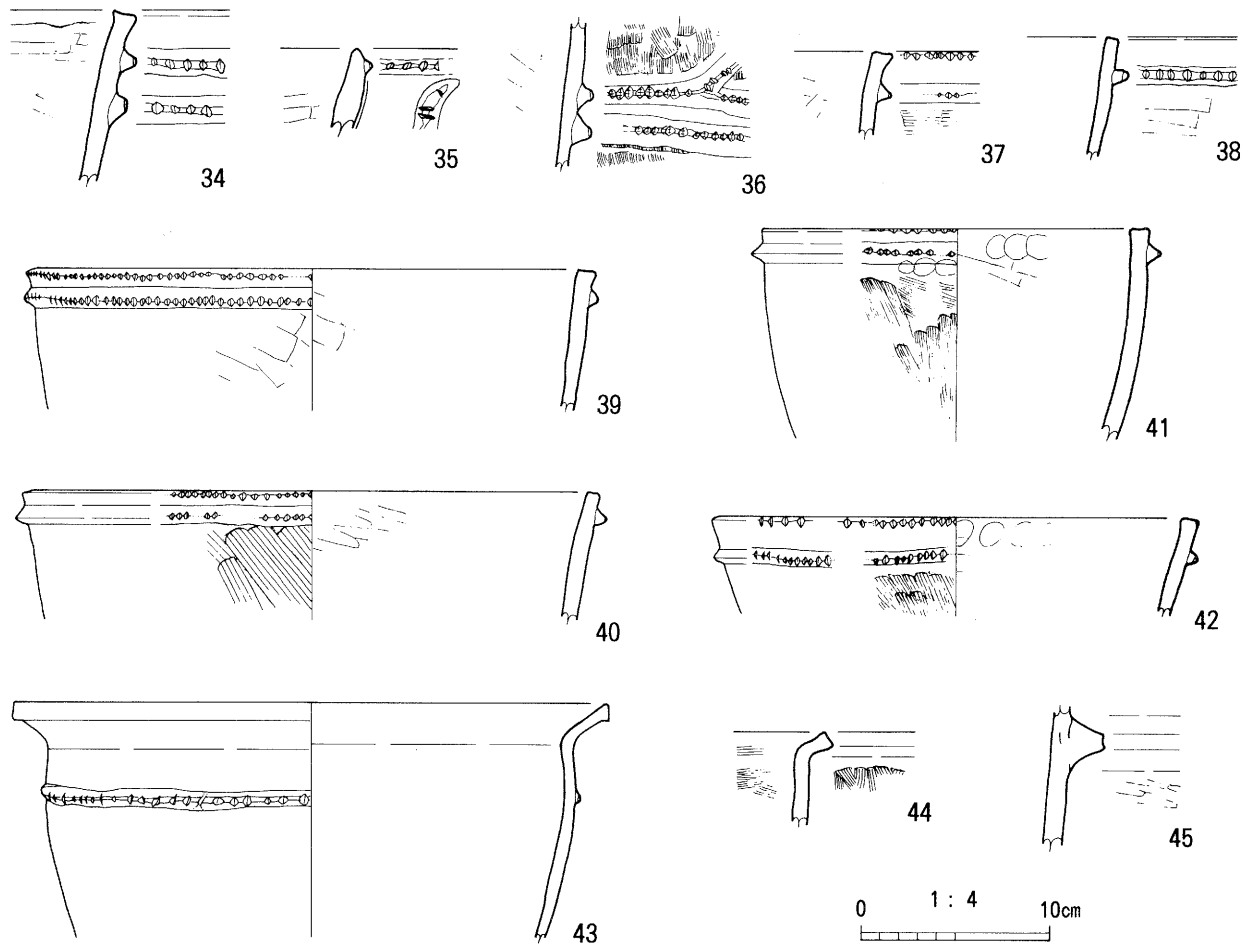
土器については、甕（1～45）、壺（46～52）の順に図を掲載している。特に甕には多くの系譜が認められるが、必ずしも十分な整理ができておらず、先後関係も不明な点が多い。

1～11は縄文系の個体（深鉢とすべきか）で、刻目突帯の上や、あるいは口縁端部に直

1	3号竪穴 深鉢 工具ナデ にぶい橙/橙	30	F-3 甕 ハケ/ナデ にぶい赤褐/明赤褐
2	F-3 深鉢 工具ナデ 黄褐/黒褐		
3	F-3 深鉢 ナデ にぶい黄褐	31	F-6 甕 ハケ/ナデ 橙/黒褐 穿孔
4	4号竪穴 深鉢 ナデ にぶい橙	32	D-2 甕 ハケ 灰褐/黒
5	D-3 深鉢 工具ナデ 浅黄橙・黒/灰褐	33	F-7 甕 ナデ にぶい赤褐
		34	A-3 甕 ナデ 橙/褐灰
6	3号竪穴 深鉢 ナデ にぶい橙	35	3号竪穴 甕 ナデ 灰黄褐/にぶい赤褐
7	1号竪穴 深鉢 ナデ 橙/にぶい橙	36	E-3 甕 ハケ/ナデ にぶい黄褐
8	1号竪穴 深鉢 ナデ 橙	37	F-6 甕 ナデ 褐灰・橙/黒褐
9	4号竪穴 深鉢 工具ナデ 橙	38	F-3 甕 ナデ にぶい橙/にぶい黄褐
10	4号竪穴 深鉢 工具ナデ 浅黄橙・橙	39	- 甕 ハケ/ナデ 橙・褐灰
11	3号竪穴 深鉢 ナデ にぶい橙/灰褐	40	F-3 甕 ハケ/ナデ にぶい橙/橙
12	F-3 甕 ナデ にぶい褐	41	- 甕 ハケ/ナデ 橙・黄灰/赤褐
13	3号竪穴 甕 ナデ 橙	42	F-6 甕 ハケ/ナデ 黒褐/赤褐/にぶい赤褐
14	H-6 甕 ミガキ状ナデ/ナデ 黄灰		
15	- ナデ にぶい黄橙	43	17号竪穴 甕 ナデ 浅黄・黄灰
16	3号竪穴 甕 ハケ/ナデ にぶい橙/橙	44	F-6 甕 ハケ/ハケ・ナデ 灰黄褐
17	- 甕 ハケ/ナデ 橙・黄灰	45	- 甕 工具ナデ/ナデ 橙/にぶい橙
18	3号竪穴 甕 ハケ/ナデ にぶい橙/橙・灰褐	46	F-3 壺 ミガキ 橙
		47	D-4 壺 ミガキ 明赤褐
19	5号竪穴 甕 ナデ 橙/黄橙	48	D-4 壺 ミガキ 明赤褐
20	4号竪穴 甕 ナデ にぶい橙/浅黄橙	49	3号竪穴 壺 ナデ 橙・にぶい黄橙
21	H-4 甕 ナデ 橙/にぶい赤褐	50	4号竪穴 壺 ナデ にぶい赤褐/にぶい褐
22	3号竪穴 甕 ナデ にぶい橙		
23	F-6 甕 ハケ/ナデ にぶい赤褐	51	4号竪穴 壺 ナデ 灰褐
24	F-6 甕 ハケ/ナデ 橙	52	2号竪穴 壺 ナデ 橙
25	F-3 甕 ナデ 橙	53	D-11 壺 ナデ 黒・にぶい褐
26	F-3 甕 ハケ/ナデ 橙・暗灰黄/橙	54	- 小形石斧 重さ30.6g 蛇紋岩
27	F-4 甕 ナデ にぶい褐/黒	55	7号竪穴 磨製石鏃 重さ1.4g 粘板岩
28	- 甕 ハケ/ナデ 橙・黒褐	56	- 土器底部か土製品? 橙
29	- 甕 ハケ/ナデ にぶい橙		



第18图 包含層出土遺物 (1)



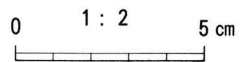
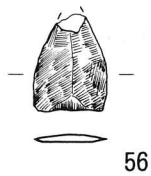
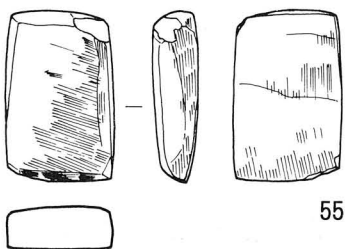
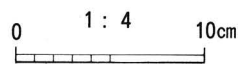
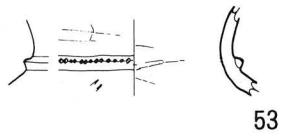
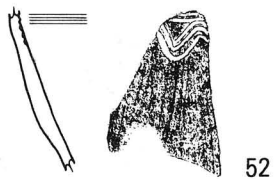
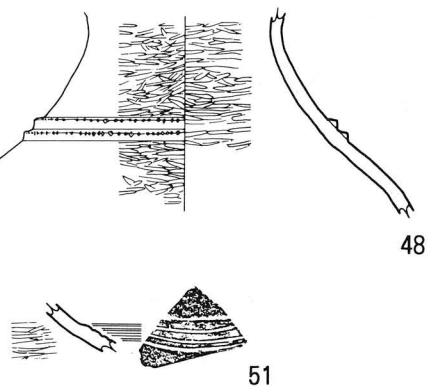
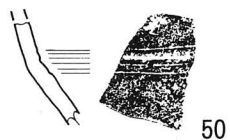
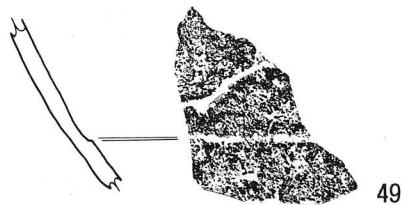
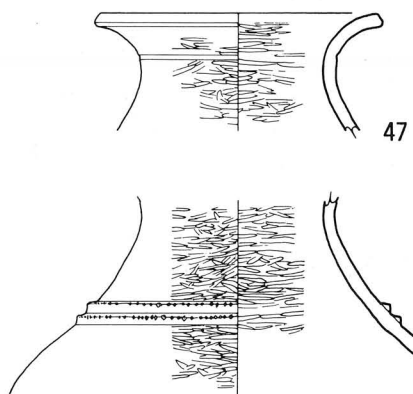
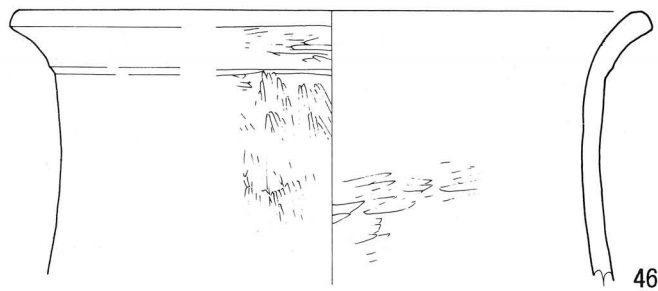
第19図 包含層出土遺物 (2)

12～42は口縁部やその下位に刻目突帯を巡らせるもの。突帯の位置や条数、口縁部の形状、胴部の張りなど多様性が認められる。21や35・36など、縦方向にのびる突帯もある。18などは、口縁上部に平坦面を形成する、亀ノ甲式に属するものである。

43・44は「く」字形に屈曲する口縁部を有するもの。胴上部に刻目突帯を巡らせる。45は大形甕の突帯部分。

46は口縁下部に段が形成される。47・48は同一個体か。これらはD-3区の「窪み」部分より出土している。47は頸部に一条の沈線を、48は肩部に刻目突帯を巡らせる。49は肩部に段が形成される。50～52には沈線が描かれる。54は沈線を施す土器の底部風であるが、上端部が「生きて」いるようにも見受けられる。2方向に計4箇所穿孔する。

石器は2点のみ図化している。55は蛇紋岩製の小形石斧で、刃部には表裏両面に研磨痕が残る。欠損品の再利用という可能性もあるが、いずれにせよ非実用品と考えるべきであろう。



第20図 包含層出土遺物 (3)

第4節 古墳時代の遺構・遺物

中期～後期に属すると見られる方形の竪穴が、确实には12基検出された。編年の基準資料となりうる土師器、須恵器が出土している。以下、番号順に概要を記す。なお、9号竪穴については痕跡を捉えたのみで、時期等の詳細は不明であるが、とりあえずこの節で取り扱った。

また、Ⅱ層より出土した遺物は、末尾に一括して掲げている。

6号竪穴

H-5・6区の調査区壁面近くで検出された。方形を呈するものであろうが、一隅を確認したのみであるため、正確な規模は不明。また北側壁面は層位攪乱の影響を受ける。検出面からの深さは約25cm。覆土はⅡ層土基調の黒褐色土。「アカホヤ」パミスや炭化物を含む。

遺物は小破片のみである。1・2は小形の甕か鉢、3・4は甕の口縁部か。

5は椀。6は高杯の杯部下底で、脚筒部の中に充填する粘土塊である。

1	甕? ミガキ状ナデ/ナデ 橙	5	鉢? ナデ 橙・黒褐
2	甕? ミガキ状ナデ/ナデ にぶい赤褐色/橙	6	高杯 - 橙
		7	甕? ナデ 橙・にぶい赤褐
3	甕? ヨコナデ 橙	8	鉢? ナデ 淡黄・浅黄橙/にぶい橙
4	甕? ヨコナデ にぶい橙/橙		

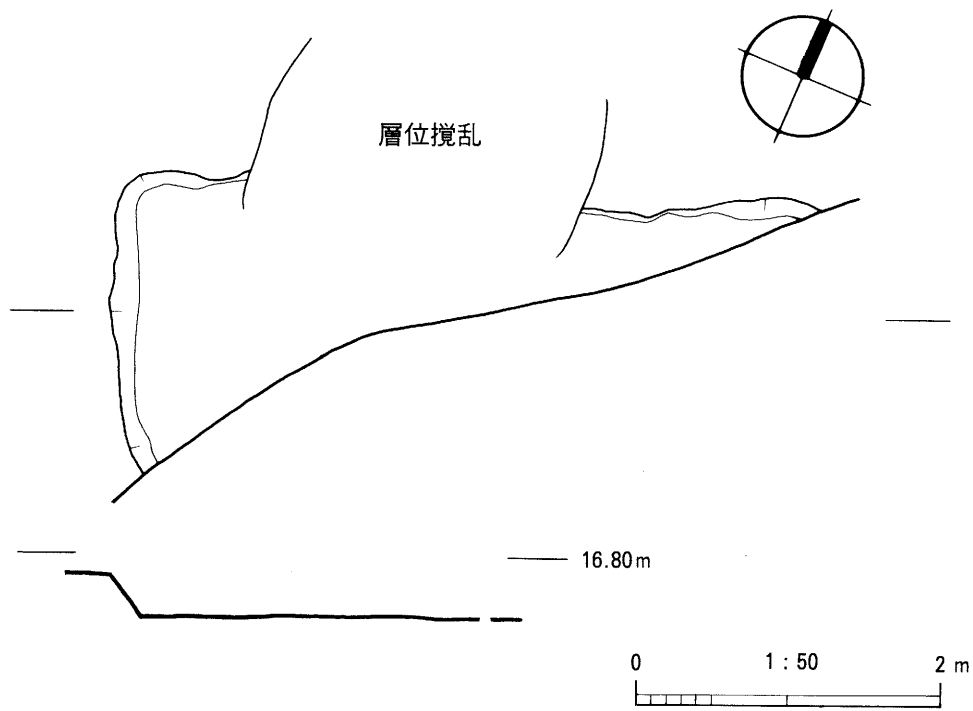
7号竪穴

D-6・7区で検出された隅丸の方形の竪穴。北東-南西方向で3.9m、北西-南東方向で3.6m。検出面から掘り込み底面までの深さは25cm～40cm。

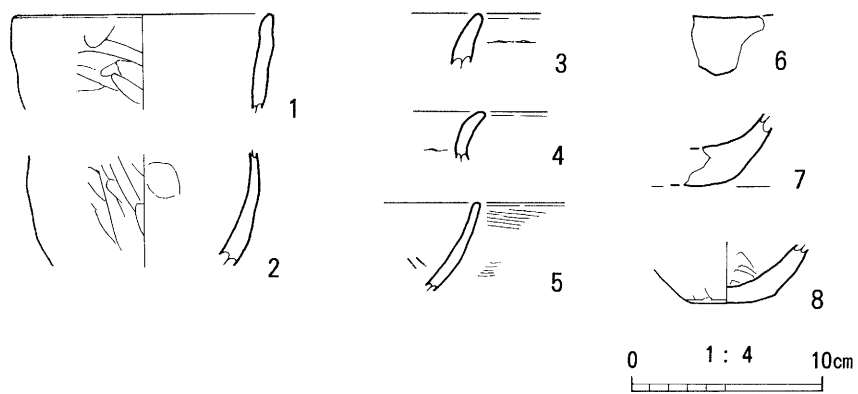
覆土は黒色土系のものであるが、やや灰色味を帯びる。床面には貼床が施されている。主柱穴は2本か。

遺物は多くないが、まとまった甕の破片(1)と椀(2)が床面のやや上位で出土している。

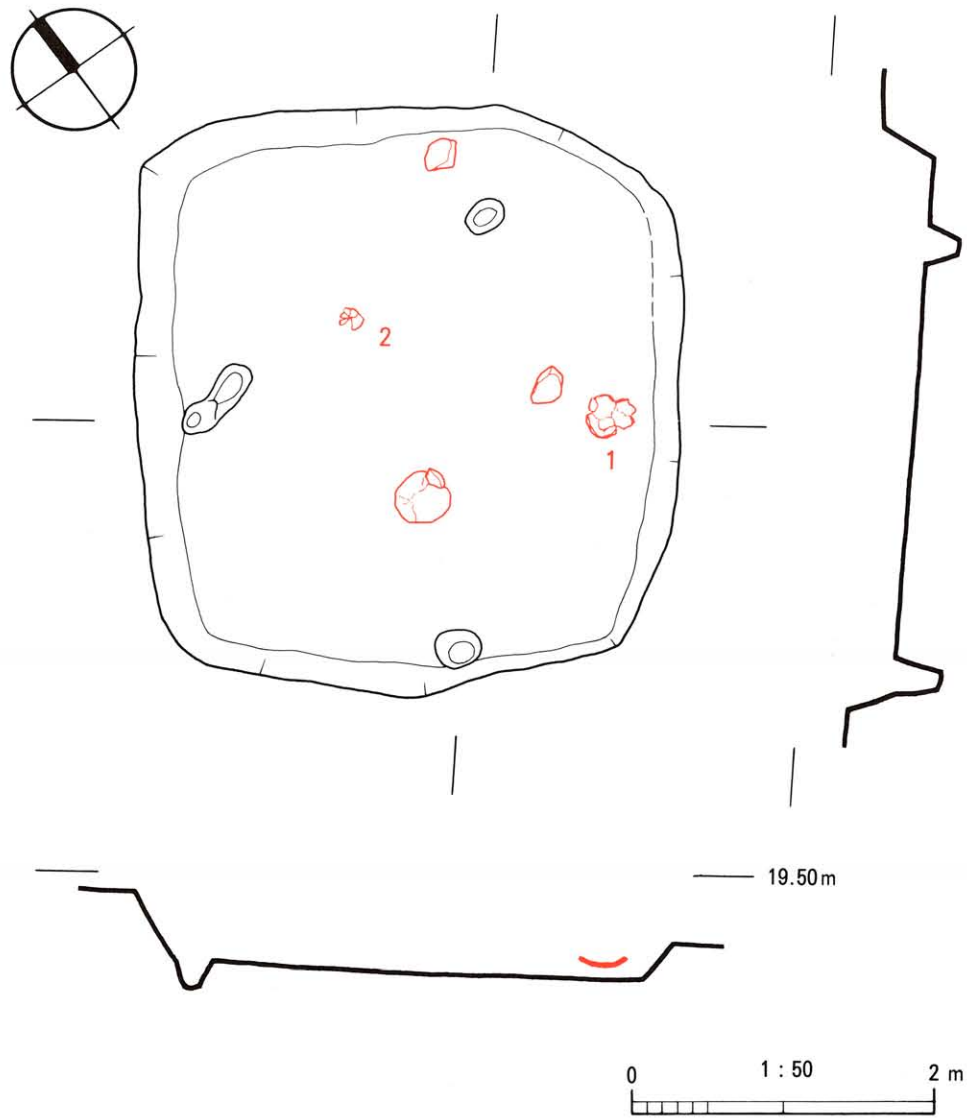
1	甕 ミガキ状ナデ/工具ナデ にぶい褐・ 灰/にぶい褐 1/1	2	椀 ナデ 明黄褐・にぶい黄橙/明黄褐・ 1/1
---	-----------------------------------	---	----------------------------



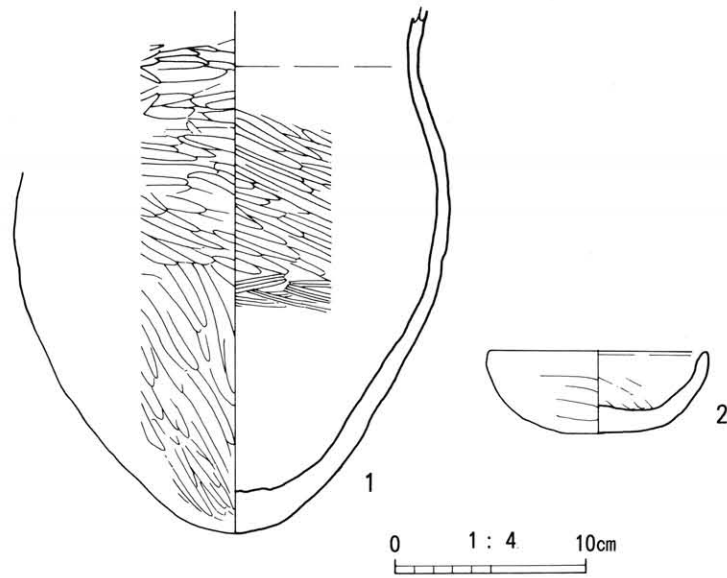
第21図 6号豎穴



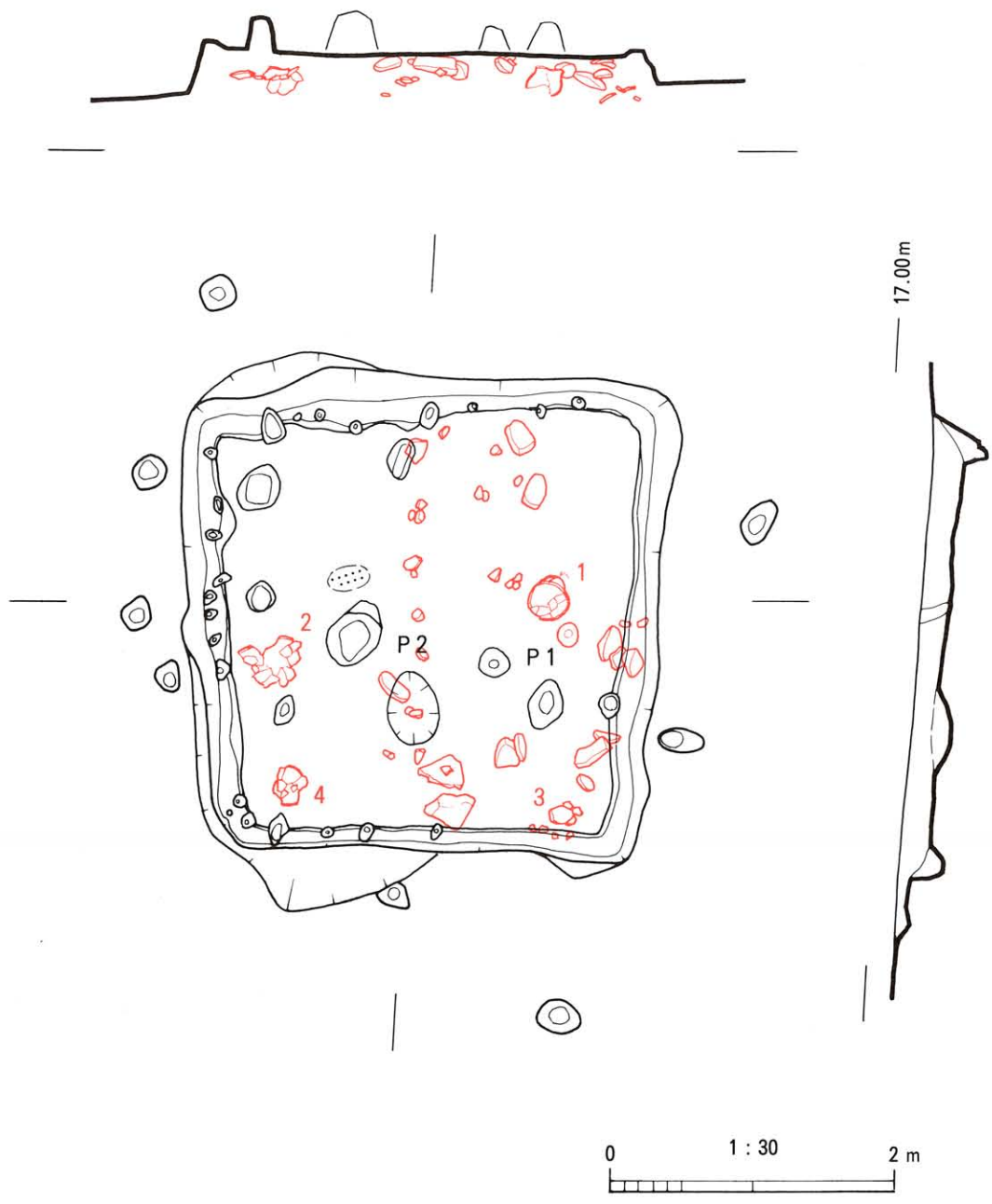
第22図 6号豎穴出土遺物



第23图 7号竖穴



第24图 7号竖穴出土遺物



第25图 8号竖穴

8号竪穴

甲区ほぼ中央のE-8区で検出された。一辺長約3.5mの小ぶりの竪穴住居。遺構主軸は約15°西偏する。

壁際には幅約20cmの壁帯溝が巡る。検出面から床面までの深さは約20cm、床面から壁帯溝底面までの深さは約15cmを測る。Ⅲ層（「アカホヤ層」）面まで掘り込み、床面を形成する。中央やや北西寄りに、火処と見られる炭化物の集積箇所がある。

主柱穴の候補と見られるPitが2基あるが確実ではない。また周辺に数基のPitが点在するが、竪穴に伴うものかどうか判然としない。

覆土はⅡ層土基調の黒褐色土で、「アカホヤ」パミスやブロック、炭化物を含む。壁帯溝中は「アカホヤ」の含有率が高くなる。

8号竪穴出土遺物

床面よりやや浮いた位置より多量出土している。

1～4は完形の丸底甕である。壁寄り出土している。器外面はミガキ状のナデにより調整され、ところにより光沢が生じている。5～7も甕で、6は内面のみハケ目が残る。

8は精製の小形壺。扁球状の胴部に外開きの直口縁が付く。

9は椀か鉢と見られる口縁部破片。

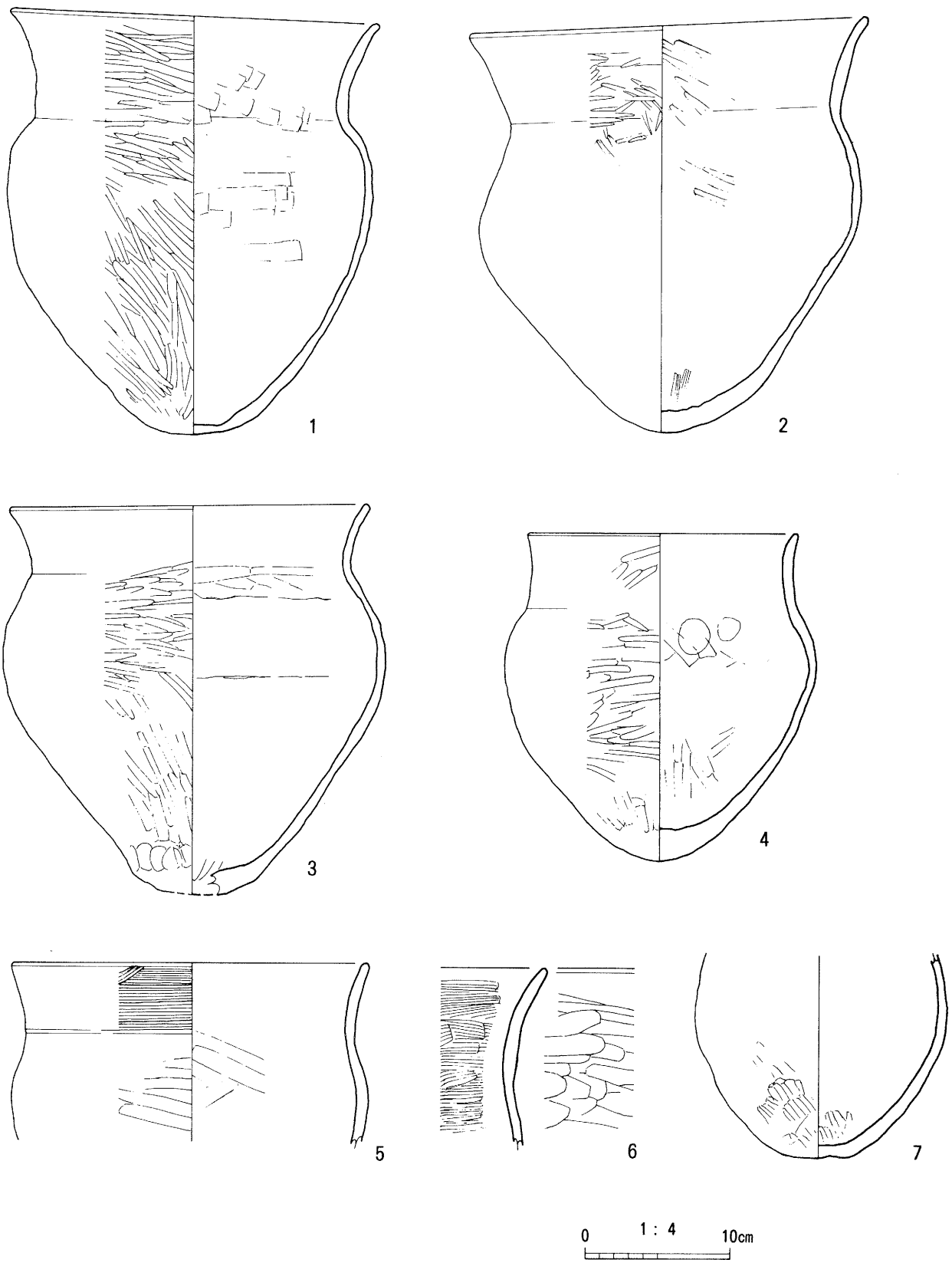
10は高杯の杯底部、11は脚部であるが、いずれも小破片で、十分に特徴を捉えられない。

1	甕 ミガキ状ナデ/工具ナデ 明赤褐/橙 スス付着 1/1	5	甕 ハケ/ナデ にぶい赤褐 1/2
		6	甕 工具ナデ/ハケ 明赤褐/橙
2	甕 ミガキ状ナデ/工具ナデ 赤褐・明赤褐 スス付着 1/1	7	甕 ナデ 橙
		8	小形壺 ミガキ/工具ナデ 橙
3	甕 ミガキ状ナデ/工具ナデ にぶい赤褐/橙 スス付着 1/1	9	椀? ミガキ/ナデ 褐灰/橙
		10	高杯 ナデ 橙/橙・黄褐
4	甕 ミガキ状ナデ/工具ナデ にぶい赤褐/橙 スス付着 1/1	11	高杯 ナデ 淡黄・浅黄橙/にぶい橙

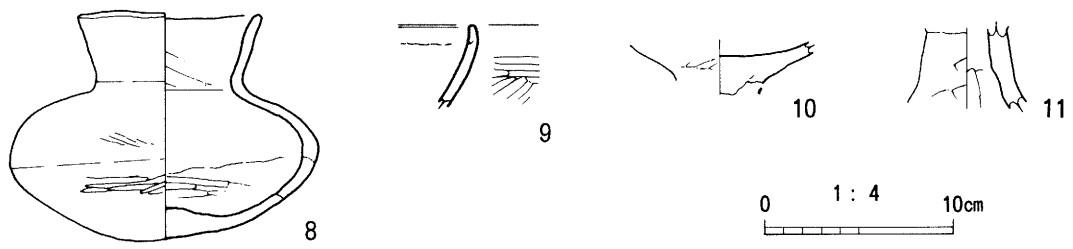
9号竪穴

E-5区にある。付近は耕作の影響で段が作出されていたため、前述の通り遺構の痕跡を捉えたのみである。東側は方形竪穴のコーナー部分と見られる。この部分の深さは約15cm程。柱穴らしきPitも認められる。反面、西側については全くプランを捉えることができない。

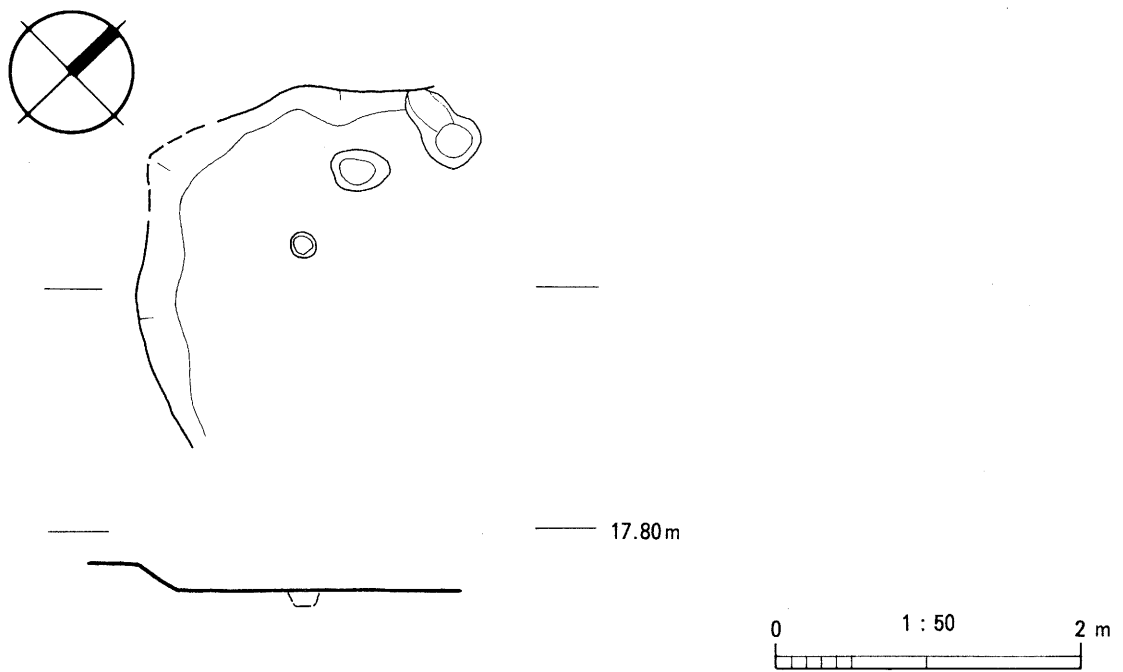
確実な出土遺物も確認できない。



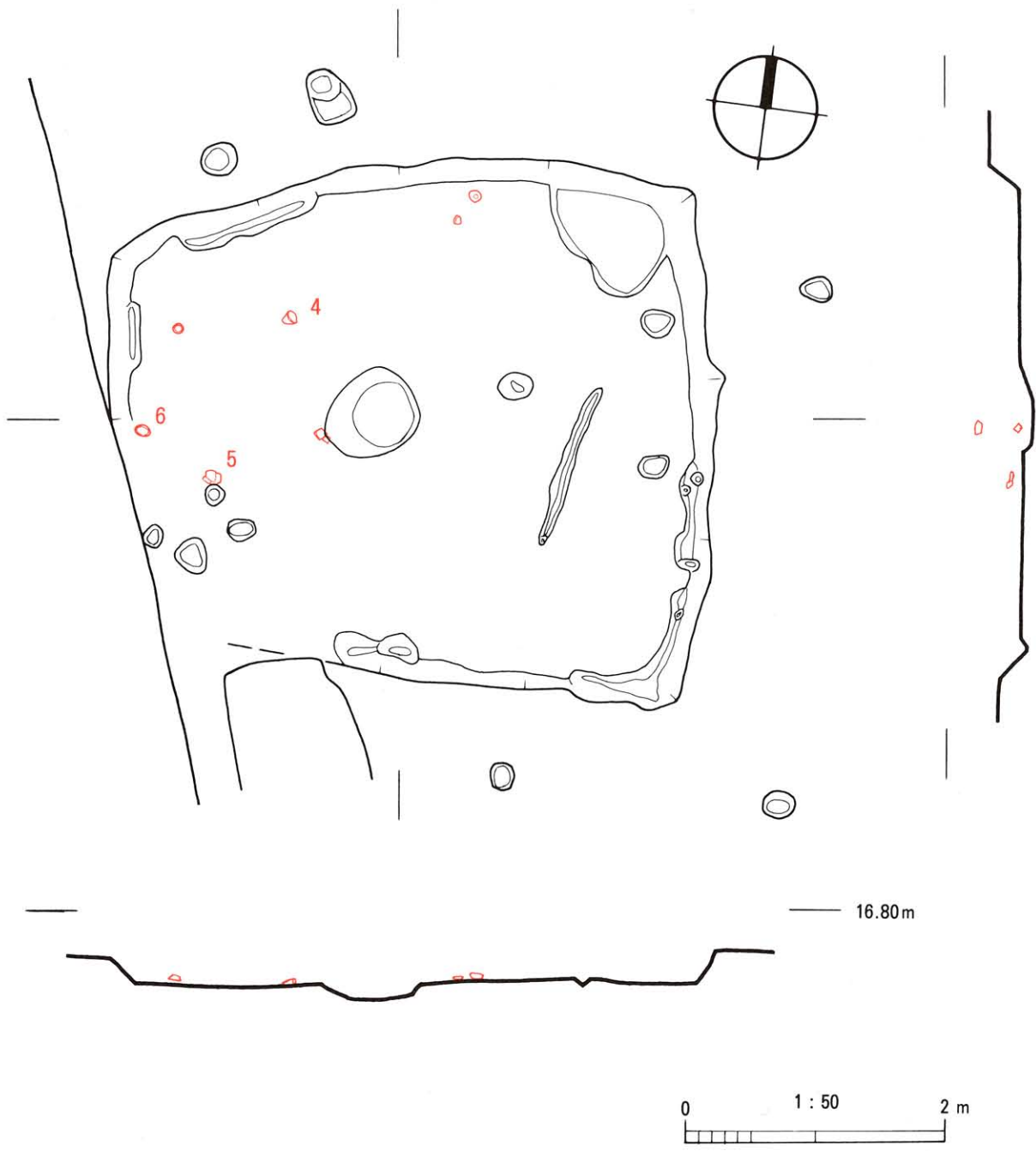
第26图 8号竖穴出土遺物(1)



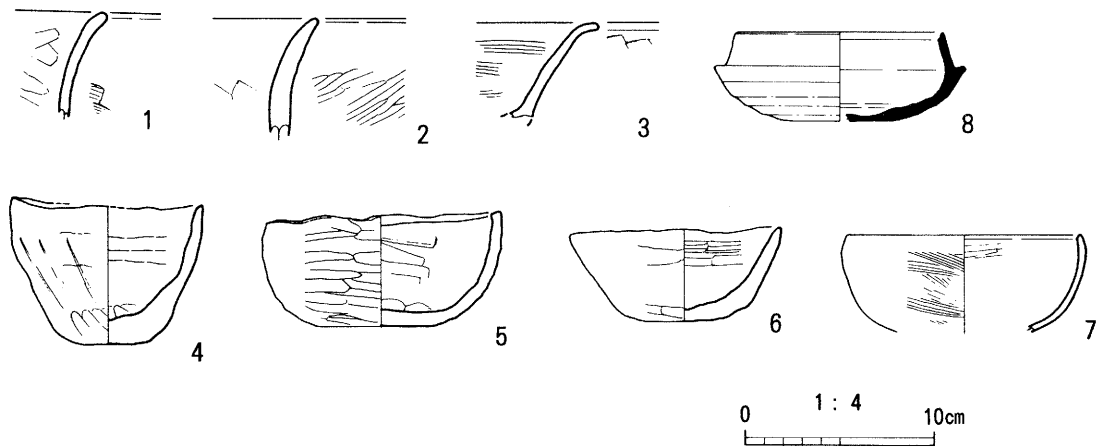
第27图 8号竖穴出土遺物(2)



第28图 9号竖穴



第29図 10号竖穴



第30図 10号竪穴出土遺物

10号竪穴

乙区の北西端で検出された方形竪穴。一部は現道にかかるため、調査できなかった。

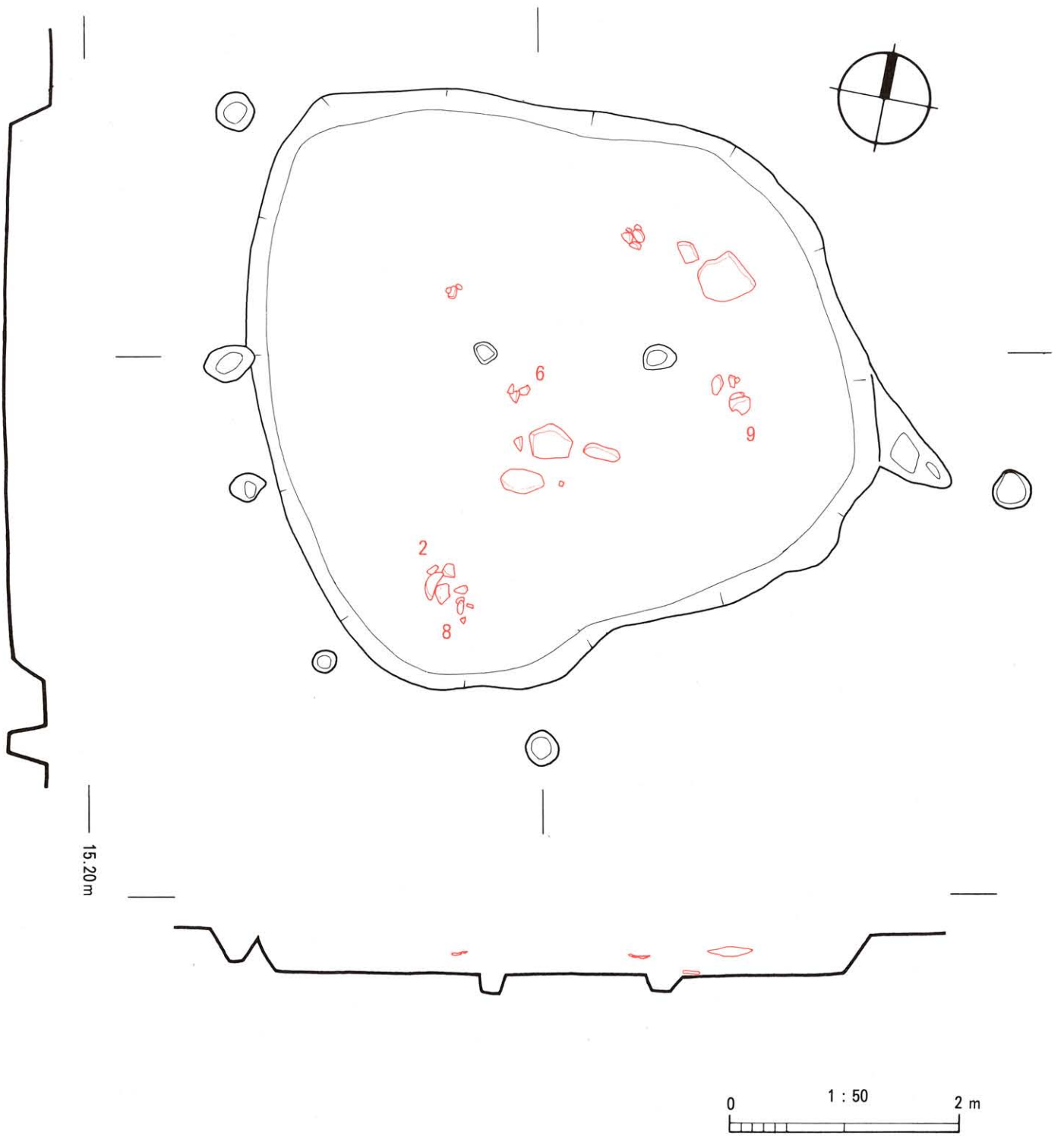
遺構主軸はほぼ南北方向を示す。平面規模は4.6m×4.0m、検出面からの深さは約20cm。床面にいくつかPitが見られるが、いずれも小さく支柱穴は判然としない。周囲にも数基のPitがあるが、これも配置から規則性は読みとれない。壁際には壁帯溝と見られる小溝がある。ただしところどころ断列化している。一方、北東隅部分は幅が広がって、深さ約15cmの土坑状になる。

覆土はⅡ層土基調の黒褐色土で、「アカホヤ」パミス、ブロックを含む。

4・8などの遺物は床面上より出土している。

1・2は甕、3は高杯の口縁部破片。4～7は椀。様々な器形が認められる。4の外面には斜方向の線刻文様が施される。

1	甕 ミガキ状ナデ/ナデ 橙 スス附着	6	椀 ナデ/ナデ・ハケ 暗灰黄/明黄褐
2	甕 ナデ にぶい赤褐/にぶい褐	7	椀 ナデ・ハケ/ナデ 明赤褐/赤褐
3	高杯 ナデ・ハケ 暗褐/橙	8	須恵器蓋杯 [身] 回転ナデ・回転ヘラケズリ 灰
4	椀 ミガキ状ナデ/ナデ 明褐 線刻		
5	椀 ミガキ状ナデ/工具ナデ 灰褐 にぶい黄褐/にぶい褐		



第31図 11号 竖穴

11号竪穴

調査区の最東端のM-11区で検出された。方形基調と見られるものの、ややいびつな平面形を呈する。最大長は南北方向で5.2m、東西方向で5.6mを測る。検出面から掘り込み底面までの深さは30cm～40cmで、「アカホヤ」ブロック、粘土塊混土による厚さ5 cm～8 cmの貼床を施し、床面を形成する。

中央部に東西方向に並ぶ柱穴が2基あり、やや間隔が狭いものの（心々間で1.5m）、それらが支柱穴と考えられる。また周囲にも小Pitが点在する。覆土は黒色土系のもので、「アカホヤ」パミスやブロックを含む。

遺物は総じて床面よりやや浮いた位置にあり、また同一レベルで自然礫も出土している。

1～8は甕。1は球形胴を呈する。2も口縁部の形状から同種のものに見られ、いずれも器壁の厚さ、調整も含め、在地の甕とは明らかに異なる。布留式を模倣したものであろう。ただし1は整理作業の結果、ある程度個体が復元できたが、出土状況はまとまりがなく、破片が竪穴内の各地に散在していた。

6～8は高杯。杯部は鈍い稜線を形成する。8はフイゴとして再利用されたと見られる。

9は椀。10・11は壺の口縁部。平底の底部12も壺のそれか。

13は全形不明。小形の脚付鉢であろうか。

1	甕 ハケ/ナデ にぶい黄橙 3/2	7	高杯 工具ナデ 橙/にぶい褐 1/4
2	甕 ハケ 橙・灰黄褐 1/2	8	高杯 ナデ にぶい褐・褐灰/にぶい橙 1/1 二次的火熱を受ける
3	甕 ナデ にぶい褐 スス付着 2/3		
4	甕 ミガキ状ナデ/ナデ 橙 スス付着 1/6	9	椀 ナデ 橙・明赤褐 1/1
		10	壺 ナデ 浅黄橙・灰白 1/6
5	甕 ミガキ状ナデ/ナデ にぶい黄橙・にぶい赤褐/黒・褐 1/6 4と同一個体か	11	壺? ナデ 明赤褐
		12	壺? ナデ 赤褐/にぶい赤褐 1/4
6	高杯 工具ナデ/ナデ 橙 1/2	13	小形鉢? ナデ 橙・黄橙

12号竪穴

10号竪穴の南東側の、K・L-11区で検出された。一部は現道にかかるため記録を作成できなかったが、発掘調査終了後、工事に入った段階ですべての掘り下げを行い、一辺長4.1mの方形竪穴と確認できた。遺構主軸は10号竪穴とほぼ同一となる。

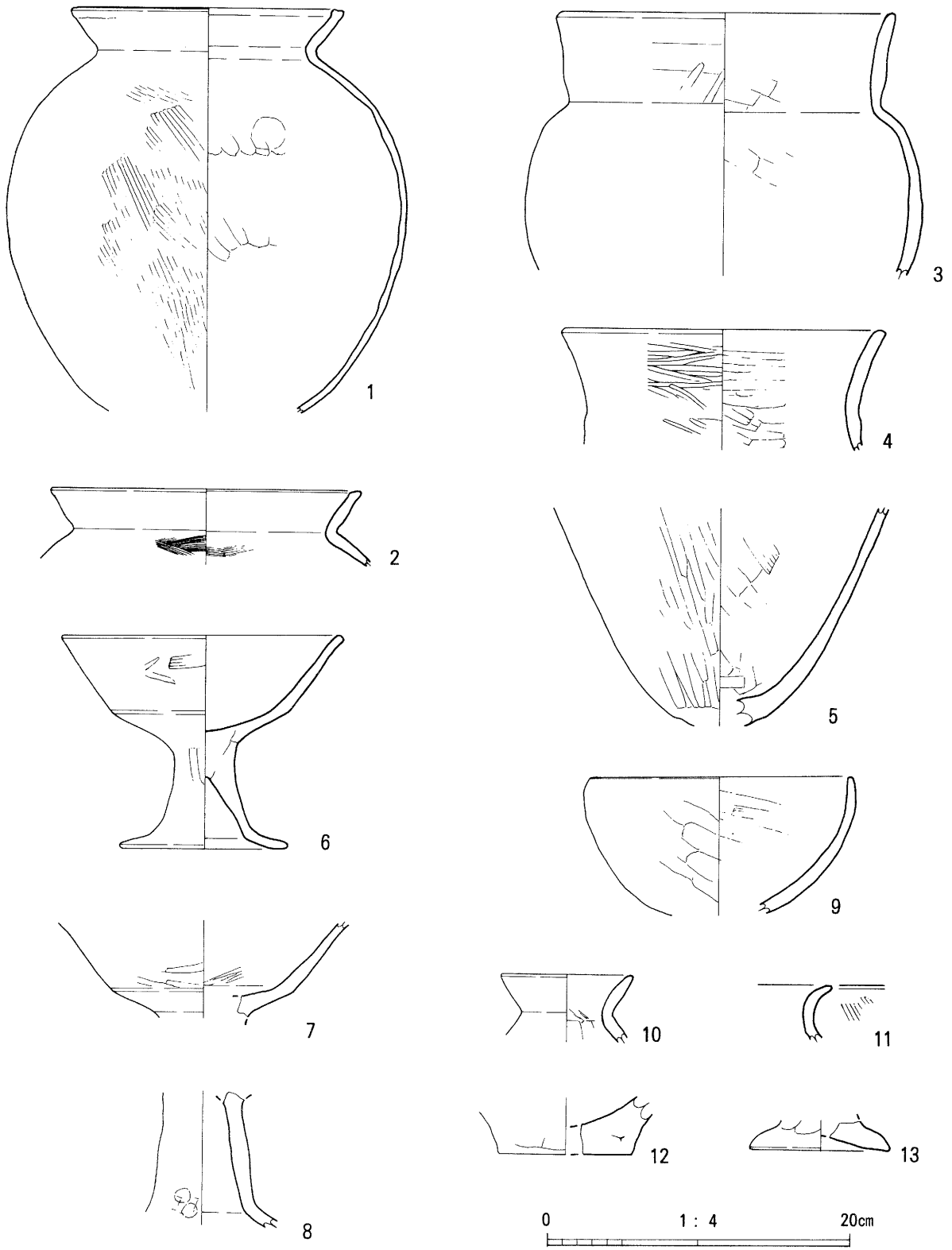
検出面から掘り込み底面までの深さは約40cmで、「アカホヤ」ブロック、粘土塊混土による厚さ約10cmの貼床を施す。覆土は黒色土系のもので、小礫を多く含む。

支柱穴と認定しうるPitは検出されなかった。

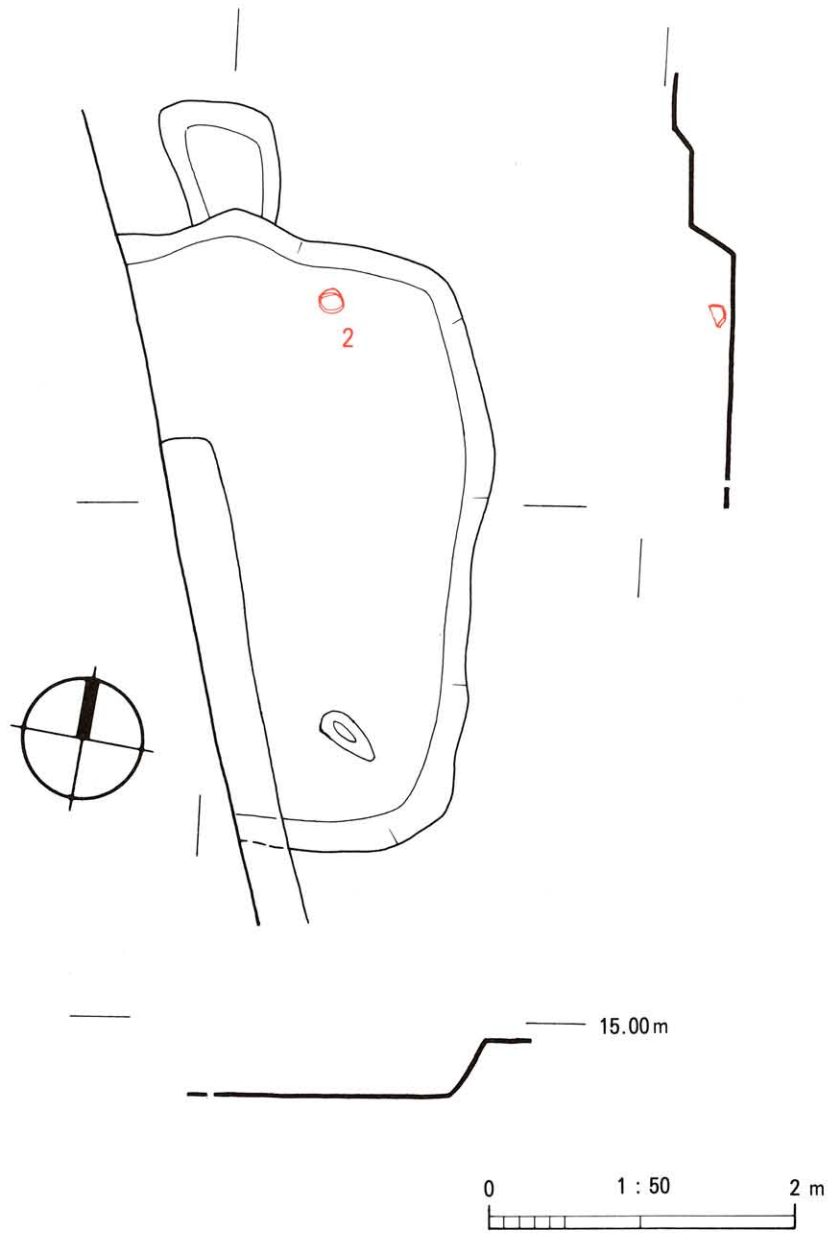
北側には土坑があり、覆土の状況から、当竪穴とあまり時期が違わないものと見られ、入口等の付帯施設であった可能性もある。

図化可能な出土遺物は少ない。2は床面上から出土した粗造の椀である。

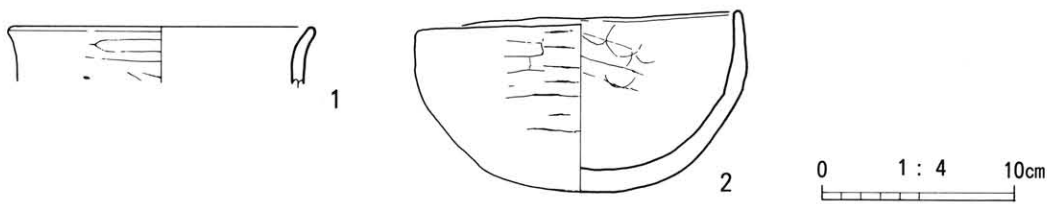
1	甕 ナデ にぶい赤褐/明赤褐	2	椀 ナデ 橙 スス付着 1/1
---	----------------	---	-----------------



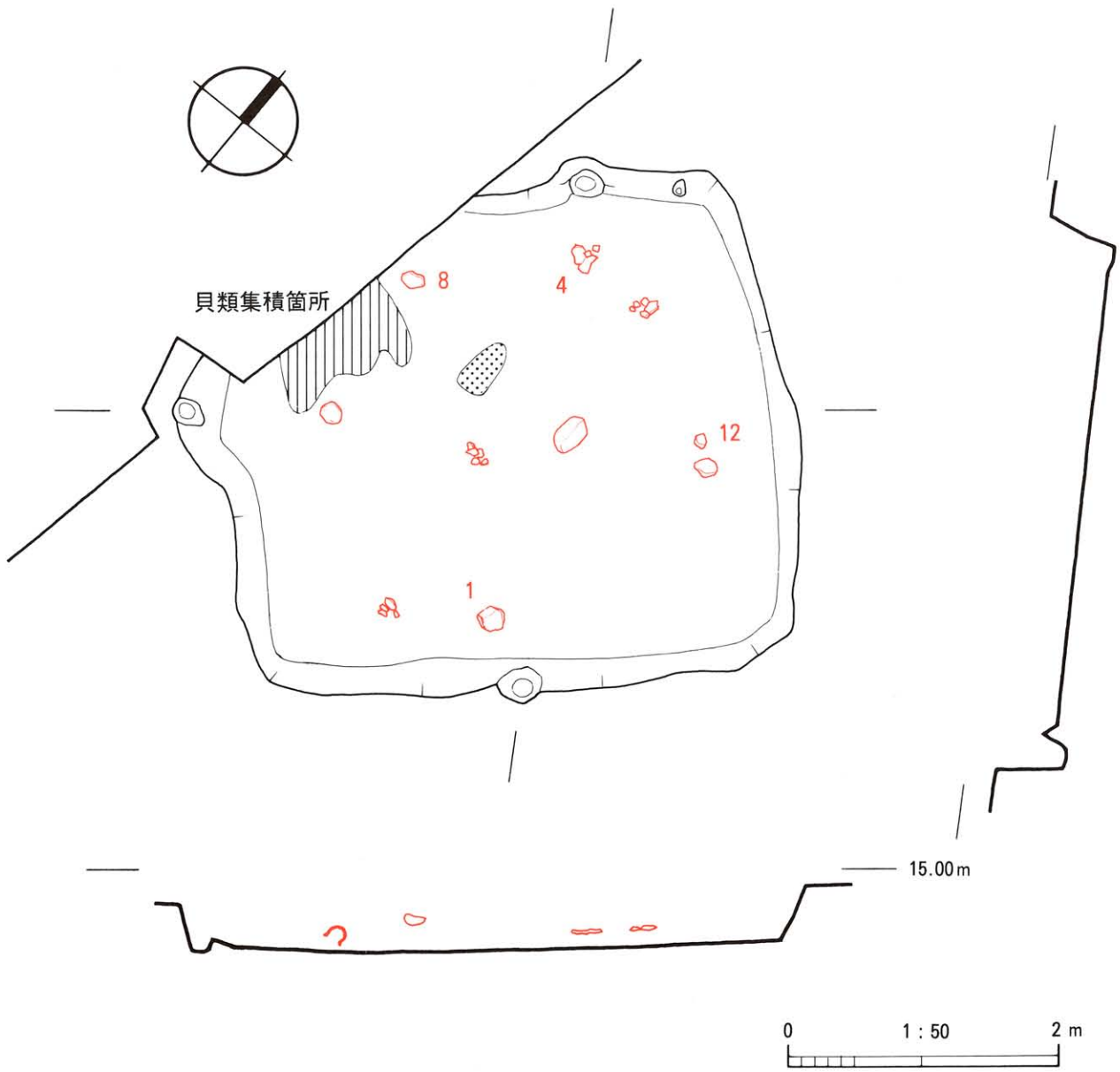
第32図 11号竖穴出土遺物



第33号 12号 豎穴



第34图 12号豎穴出土遺物



第35図 13号 竖穴

13号竪穴

J・K-11・12区にある。4.0m×3.8mの方形竪穴で、西側隅部付近は調査区外にのびる。検出面から掘り込み底面までの深さは30cm～40cmで、「アカホヤ」ブロック、粘土塊、小礫混凝土による厚さ約12cmの貼床を施す。中央やや西寄りに焼土面があるが、そのレベルがほぼ床面高と見てよいものと考えられる。遺構主軸はちょうど45°程振れている。

床面には支柱穴とおぼしきPitは見られなかったが、北東の一边を除く3辺のほぼ中央に（北西辺はやや端に寄るが）、小さな柱穴がある。深さもほぼ一定で、ほぼ直に立ち上がる。確認したものが3基のみで、确实なところは不明であるが、何らかの形で上屋構造を支える柱が立っていた可能性が高いと見られる。

覆土はⅡ層土基調の黒褐色土であるが、かなり黒味が強い。「アカホヤ」パミス、ブロックを多く含む。それらは特に北半部に目立って多い。

13号竪穴出土遺物

出土遺物のうち1は覆土上部より、7・12は床面上で出土している。

また特筆すべき事象として、貝類の集積箇所が存在が挙げられる。覆土中位に5cmほどの厚さを成して堆積していた。現地で確認したところではマカキが目立って多かった。おそらく住居跡廃絶後に投棄したものであろう。

1は完形の甕。頸部がわずかにくびれる。2・3は甕の口縁部か。

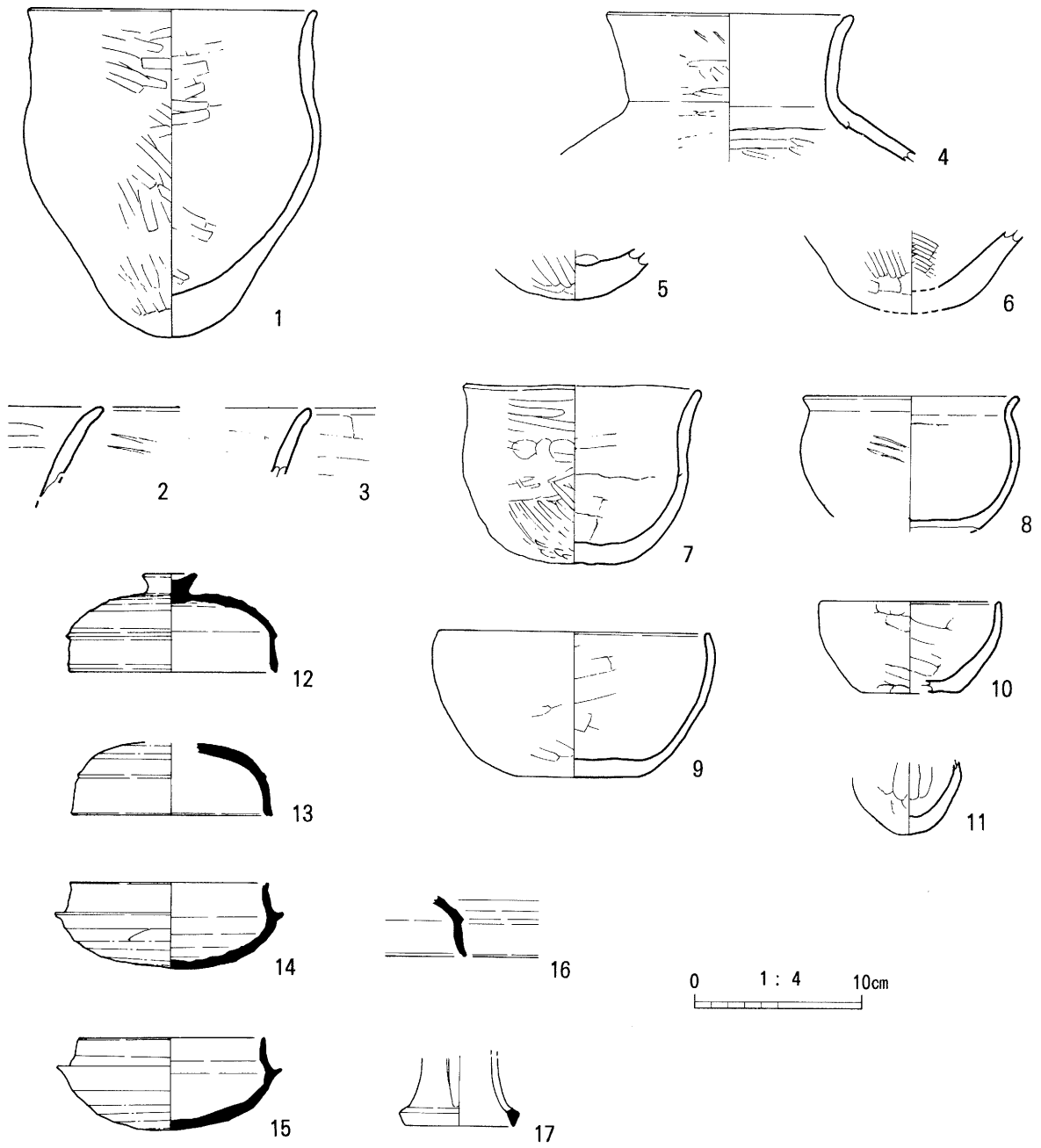
4は壺の口縁～頸部。内面に粘土の接合痕が明瞭に残る。5・6は甕ないしは壺の底部。

7～10は椀。7・8は口縁部が外反するもので、鉢とすべきか。11は粗造の小形器種。

12～16は須恵器の杯。いずれも概ね体部の半ばまで回転ヘラケズリが施される。12の蓋にはつまみが付く。回転ヘラケズリの方向は、14では反時計回り、15では時計回りとなる。

17は須恵器の高杯脚端部で、透し孔がある。

1	甕 ミガキ状ナデ/工具ナデ にぶい橙 スス附着 1/2	11	小形(粗製)椀? ナデ 橙 1/2
		12	須恵器蓋杯[蓋] 回転ナデ・回転ヘラケズリ 灰 1/3
2	甕 ナデ にぶい橙	13	須恵器蓋杯[蓋] 回転ナデ・回転ヘラケヘラケズリ 灰/褐灰 1/6
3	甕 ナデ にぶい橙		
4	壺 ナデ 明赤褐・橙 スス附着 1/1	14	須恵器蓋杯[身] 回転ナデ・回転ヘラケズリ 明灰黄 1/2
5	甕? 工具ナデ/ナデ にぶい黄橙 1/1		
6	甕? ミガキ状ナデ/工具ナデ にぶい褐/にぶい赤褐 1/2	15	須恵器蓋杯[身] 回転ナデ・回転ヘラケズリ 灰 1/1
		16	須恵器蓋杯[蓋] 回転ナデ・回転ヘラケズリ 灰
7	椀 工具ナデ にぶい褐 2/3		
8	椀 ナデ にぶい橙・にぶい黄橙 1/1	17	須恵器高杯 回転ナデ 灰 透し孔 1/4
9	椀 工具ナデ にぶい黄橙 1/4		
10	椀 ナデ にぶい橙 1/2		



第36图 13号竖穴出土遺物

14号竪穴

乙区のほぼ中央のJ-13区にある。主軸をほぼ南北方向にとる。方形の竪穴であるが、東辺の方が西辺に比べて長い。最大長は南北方向で4.9m、東西方向で5.2mを測る。

検出面から掘り込み底面までの深さは約50cmで、残存状況は他と比較して良好と言える。床面は「アカホヤ」ブロック、黒褐色土の混土による厚さ5cm～8cmの貼床を施し、固めている様子がかがえる（第37図の土層図参照）。

この竪穴も支柱穴が判然としない。西寄りに2基のPitがあるが、西に寄りすぎているため、支柱穴たり得ないであろう。東側にあるPitはごく浅いものである。

覆土はⅡ層土基調の黒褐色土で、①「アカホヤ」パミスや炭化物を含む。②はやや黒味が強くなり、「アカホヤ」のブロックも若干目立つ。③は色調その他は①と同じであるが、「アカホヤ」パミスの含有率が高くなる。やはり④も基本は変わらないが、1cm～3cm大の「アカホヤ」ブロックを多く含む。⑤は他の箇所と比べると粘性が高く、断面を削ると光沢を発する。炭化物を多く含む。最下層は、前述の貼床土である。

14号竪穴出土遺物

2・5などはほぼ床面上より出土している。

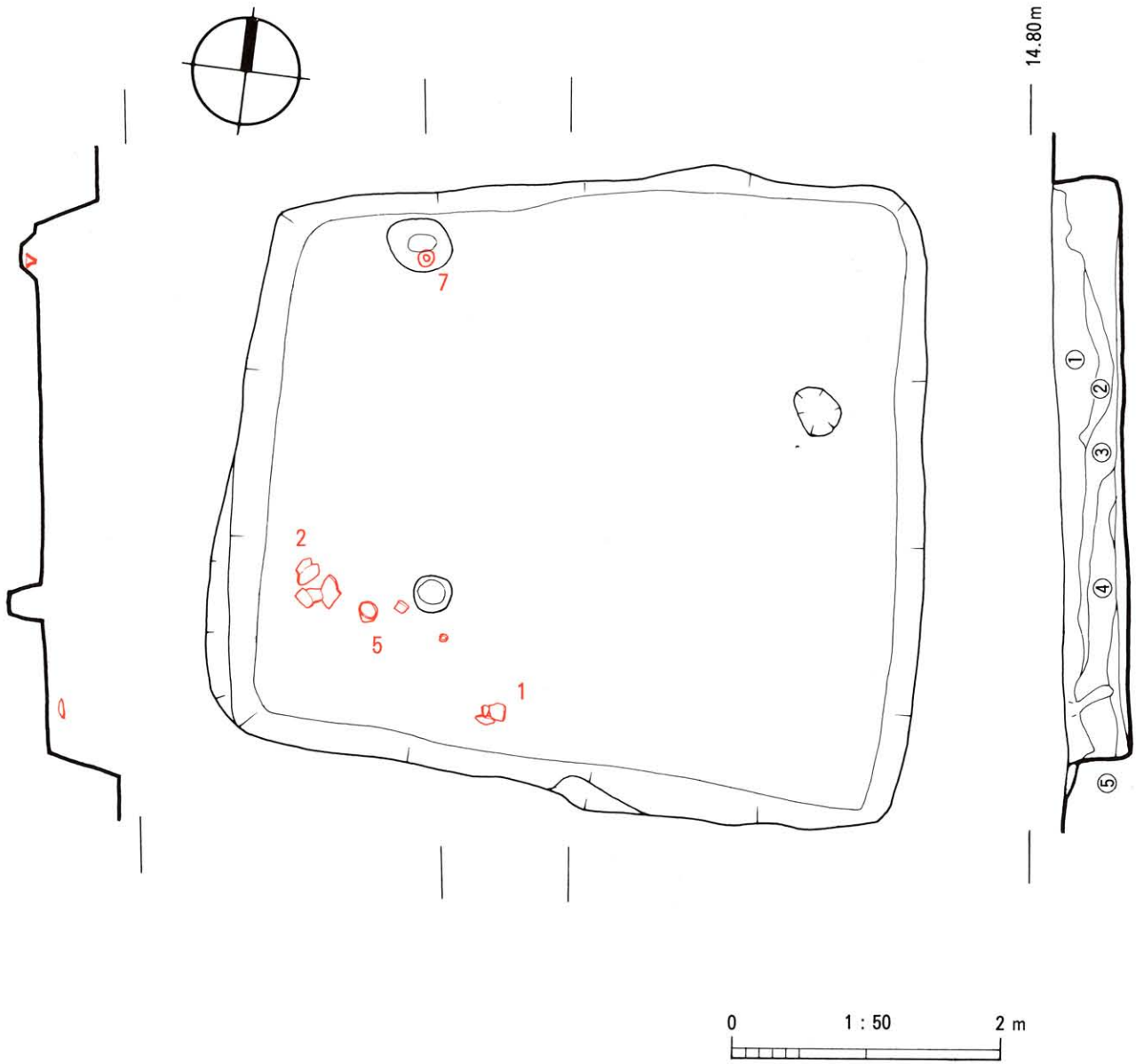
1・2は甕で、これらも他同様、外面はミガキ状の調整によりにぶい光沢を発している。

3は鉢の底部、4は甕か壺の底部と見られるが、全容は不明。

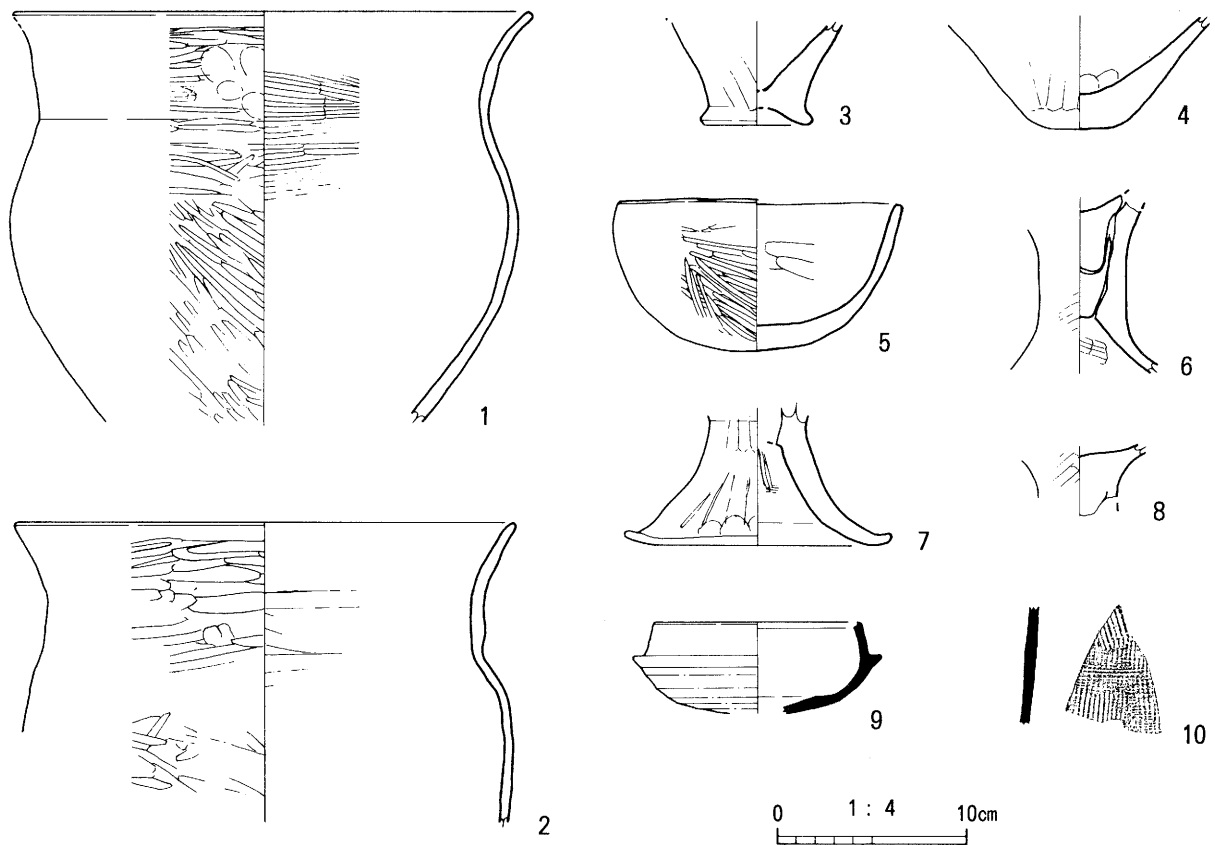
5は粗造の椀。外面にススが付着している。6～8は高杯で、6では、杯底部と脚上部の接合の様子が良く理解できる。8が杯部と脚部の接合後に、杯底部に充填した粘土塊を含む部位である。

9・10は須恵器。9は杯身。体部の大部分に回転ヘラケズリが及ぶ。ただし破片自体は小さく、出土状況もまとまりはない。

1	甕 ミガキ状ナデ／ハケ・ナデ にぶい黄 橙／にぶい赤褐 スス付着 1/2	6	高杯 ナデ／工具ナデ 橙・黒褐 1/1
		7	高杯 工具ナデ・ナデ にぶい橙 接合痕 明瞭 1/1
2	甕 ミガキ状ナデ・ナデ 橙・灰褐 1/1 スス付着	8	高杯 ナデ 淡橙／浅黄橙 1/1
		9	須恵器蓋杯 [身] 回転ナデ・回転ヘラケ ズリ 杯 1/5
3	鉢? 工具ナデ／ナデ にぶい橙／にぶい 黄褐 1/6	10	須恵器甕? 格子目タタキ／ナデ 灰／黄 灰
4	壺? ナデ にぶい褐・灰黄褐 1/3		
5	椀 ミガキ／ナデ 明赤褐・黒褐 スス付 着 1/1		



第37图 14号竖穴



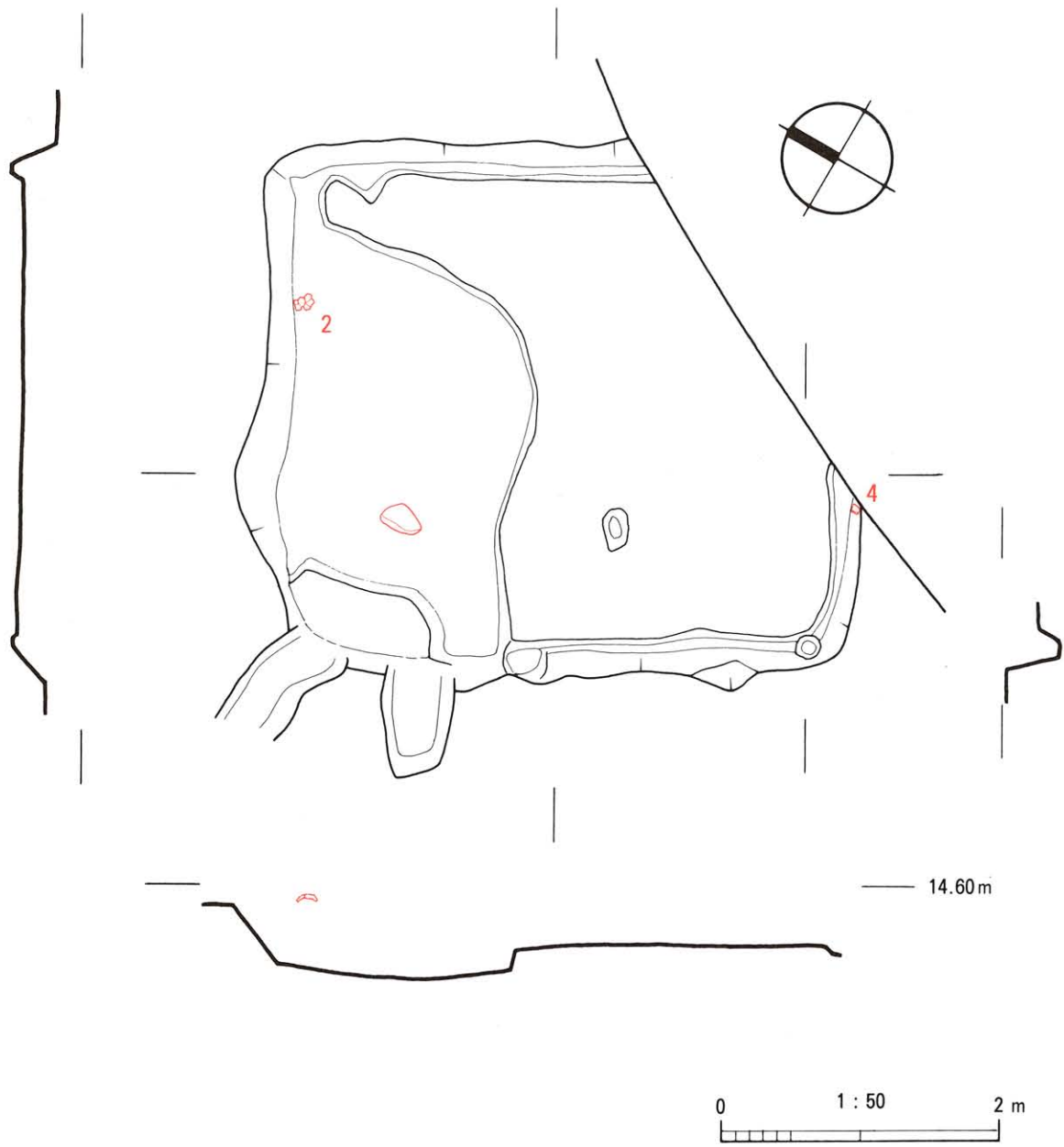
第38図 14号竪穴出土遺物

15号竪穴

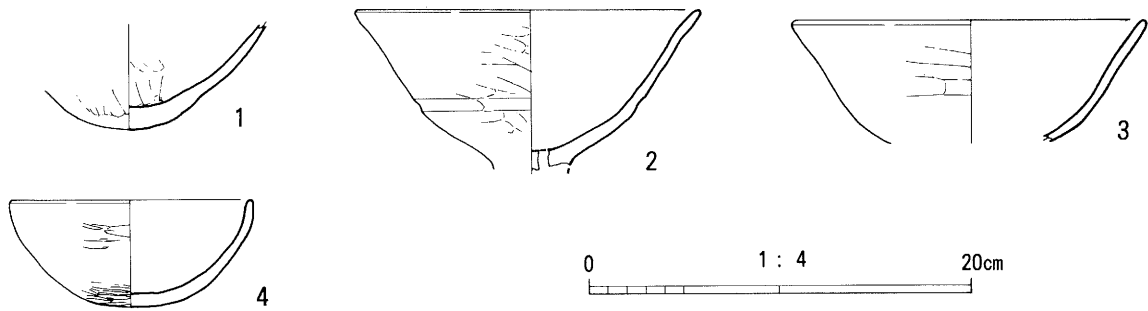
K-14区で検出された方形竪穴。遺構主軸は約28°西偏する。北側コーナー付近は調査区外となる。北西-南東方向で4.4m、北東-南西方向で4.0m、検出面からの深さは最深部で約50cmを測る。

北西側は床面が一段（最深部で約30cm）深くなる。また壁際に壁帯溝が巡り、北側ではそれが段落ち部に「注ぎ込む」形となっている。床面に小Pitがあるが、支柱穴は不明。

覆土は黒褐色土で、「アカホヤ」パミス、ブロックを多く含む。特に段落ち部に多い。



第39図 15号 豎穴



第40図 15号竪穴出土遺物

遺物は他の竪穴と比較すると少ない。1・2を含め、いずれも覆土中より出土している。

1は甕の底部か。2・3は高杯の杯部。2は外面屈曲部に段が認められる。ただし屈曲は鈍い。それは3も同様である。4は椀状を呈する。

1	甕 工具ナデ 橙・にぶい黄橙 1/2	2	高杯 ハケ/ナデ 橙・浅黄 3/4
3	高杯 ナデ 橙 1/6	4	椀 ミガキ状ナデ 橙 1/1

16号竪穴

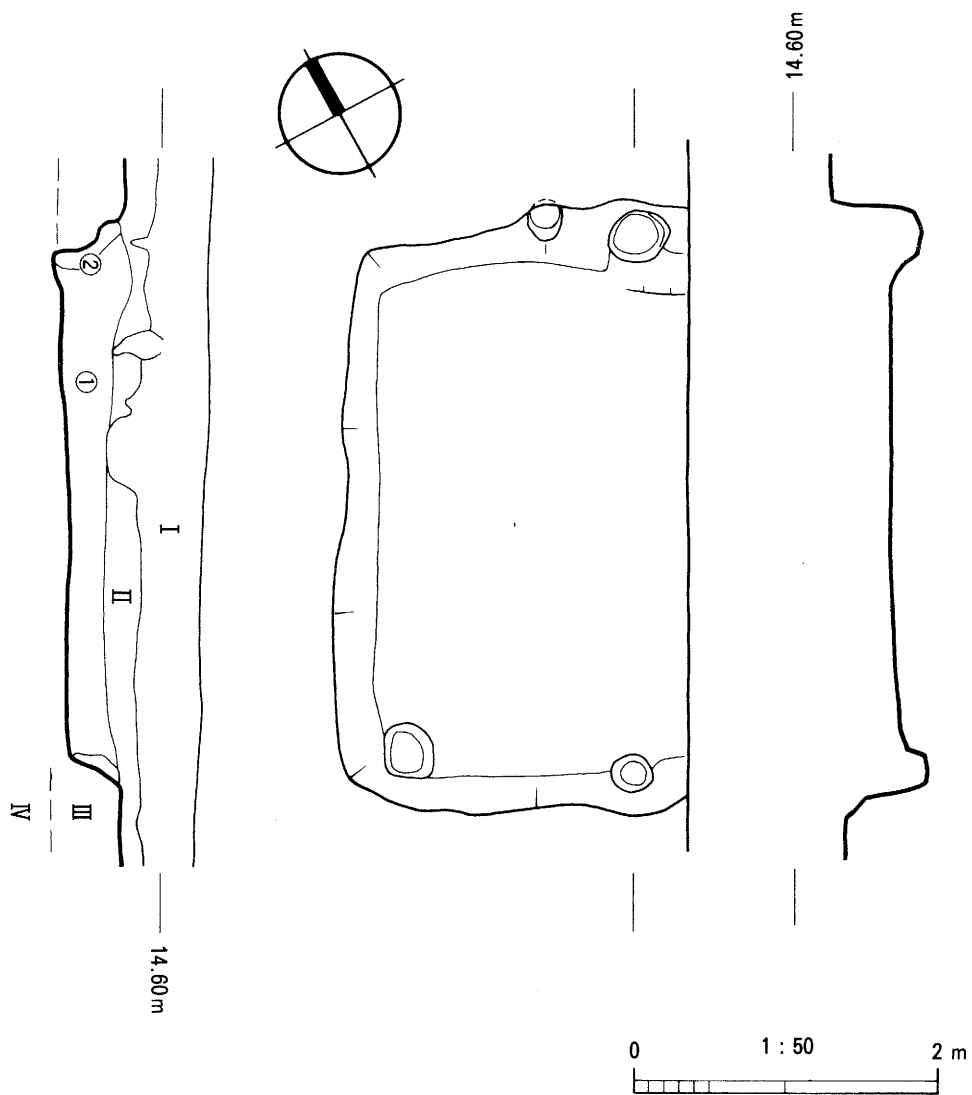
15号竪穴の南西隣にある。南東側半分は調査区外となる。遺構主軸は約30°東偏する。判明する一辺長は4.0m、検出面から床面までの深さは約30cmを測る。

壁際は不明瞭ながら溝状に窪む。北東と南西の両壁面近くにPitがあり、主柱穴であると見られる。

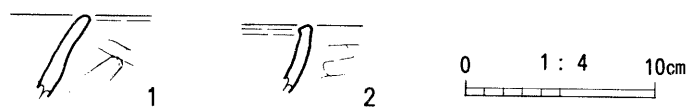
覆土は、基本的には黒褐色土で、II層土よりやや黒味が強い。図中②の部分は「アカホヤ」パミズ、ブロックを多く含む。

出土遺物は少ない。1は鉢、2は椀状の器種か。

1	鉢? ナデ にぶい褐/にぶい橙	2	椀? ナデ 橙
---	-----------------	---	---------



第41図 16号 豎穴



第42図 16号豎穴出土遺物

17号竪穴

I・J-14・15区で検出された。3.8m×3.6mの方形竪穴。検出面から床面までの深さは約30cmを測る。5°程西偏するが、ほぼ南北方向に主軸をとる。

主柱穴ははっきりしない。一部途切れているが、壁際には壁帯溝が見られる。

覆土は黒褐色土で、「アカホヤ」ブロックが混じる。

17号竪穴出土遺物

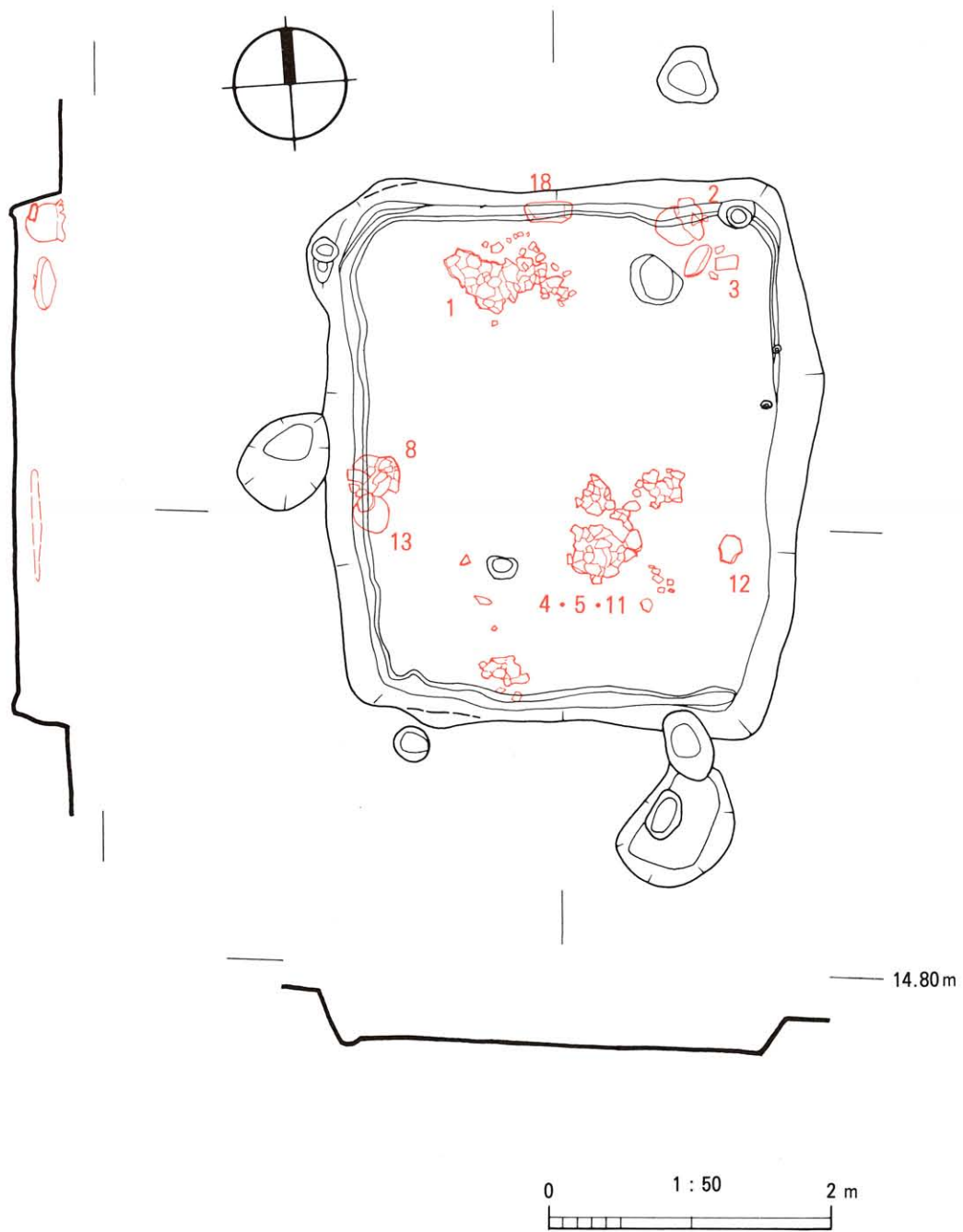
床面よりやや浮いた位置で、多くの遺物が出土している。

1～12は甕である。他同様、外面にはミガキ状の工具ナデ調整が施される。7はやや小ぶりの甕か。また14・15は甕の底部と見られる。

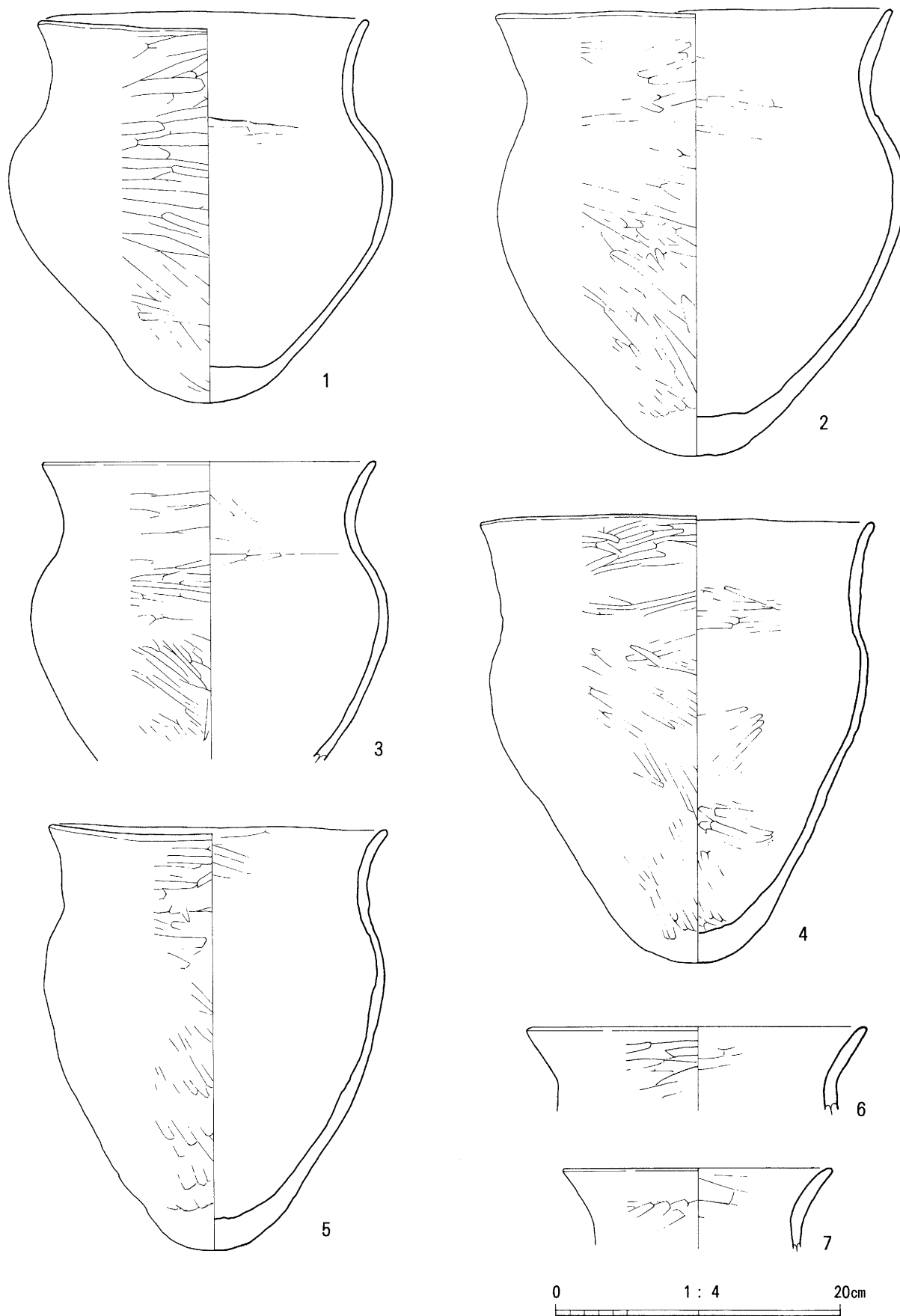
13は壺状を呈するが、外面に火熱を受けた痕跡が認められる。

16は鉢、17は粗製の小形器種。18は石皿状の扁平礫で、敲打・擦過の結果、上面中央部が凹む。作業台のような機能を有するものであろうが、床面からの出土ではなく、北側壁面付近に「落ち込む」様な形で在った。

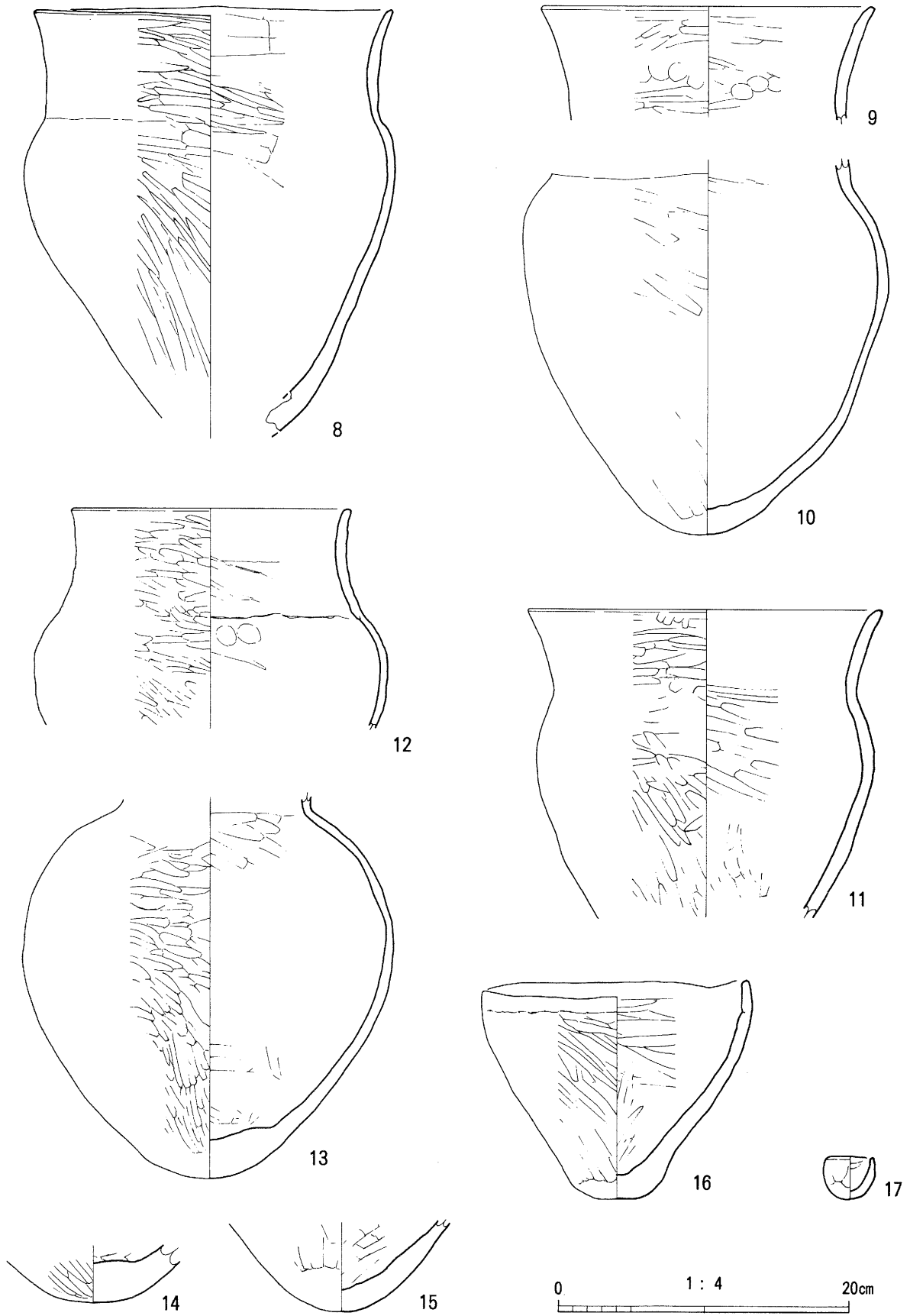
1	甕 ミガキ状ナデ/ナデ におい橙・赤褐 スス附着 1/1	10	甕 ミガキ状ナデ におい黄褐・褐/褐・ 灰褐 2/3 9と同一か
2	甕 ミガキ状ナデ/ナデ 橙・褐 1/1	11	甕 工具ナデ/ナデ におい褐・黒褐明赤 褐 1/3
3	甕 ミガキ状ナデ/ナデ 明赤褐 1/4		
4	甕 ミガキ状ナデ/ナデ 橙・におい褐ス ス附着 1/1	12	甕 ミガキ状ナデ 橙 1/1
5	甕 ミガキ状ナデ/ナデ 褐・におい褐1/ 1 火熱を受ける	13	壺? ミガキ状ナデ/工具ナデ 橙 スス 附着 1/1
		14	甕? ミガキ状ナデ 橙/明赤褐 1/1
6	甕 ミガキ状ナデ/ナデ 黄褐 1/5	15	甕? 工具ナデ 橙 1/1
7	甕 工具ナデ 橙 1/5	16	鉢 ミガキ状ナデ・ナデ 明赤褐・橙 ス ス附着 1/1
8	甕 ミガキ状ナデ 明赤褐・橙 スス附着 1/1		
9	甕 ミガキ状ナデ 明赤褐 1/3	17	小形(粗製)碗 ナデ 橙 1/1
		18	台石 砂岩製 重さ7.0g



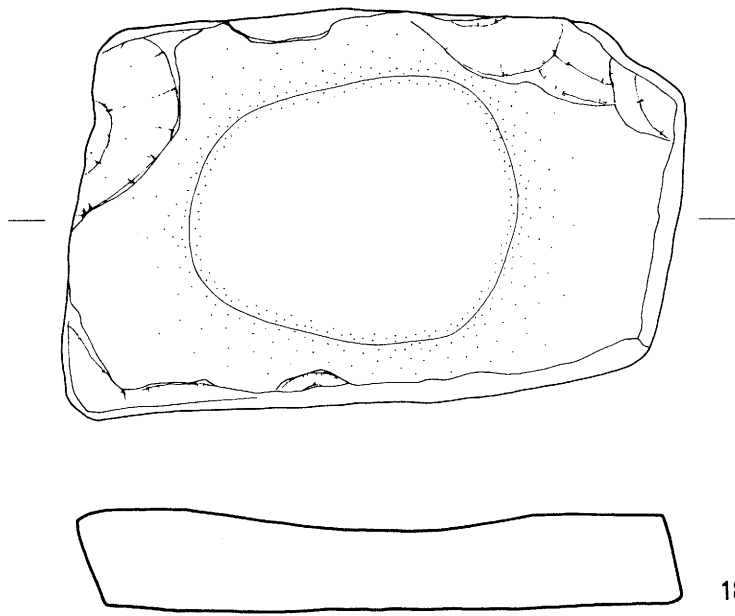
第43図 17号 豎穴



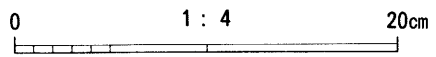
第44图 17号竖穴出土遺物 (1)



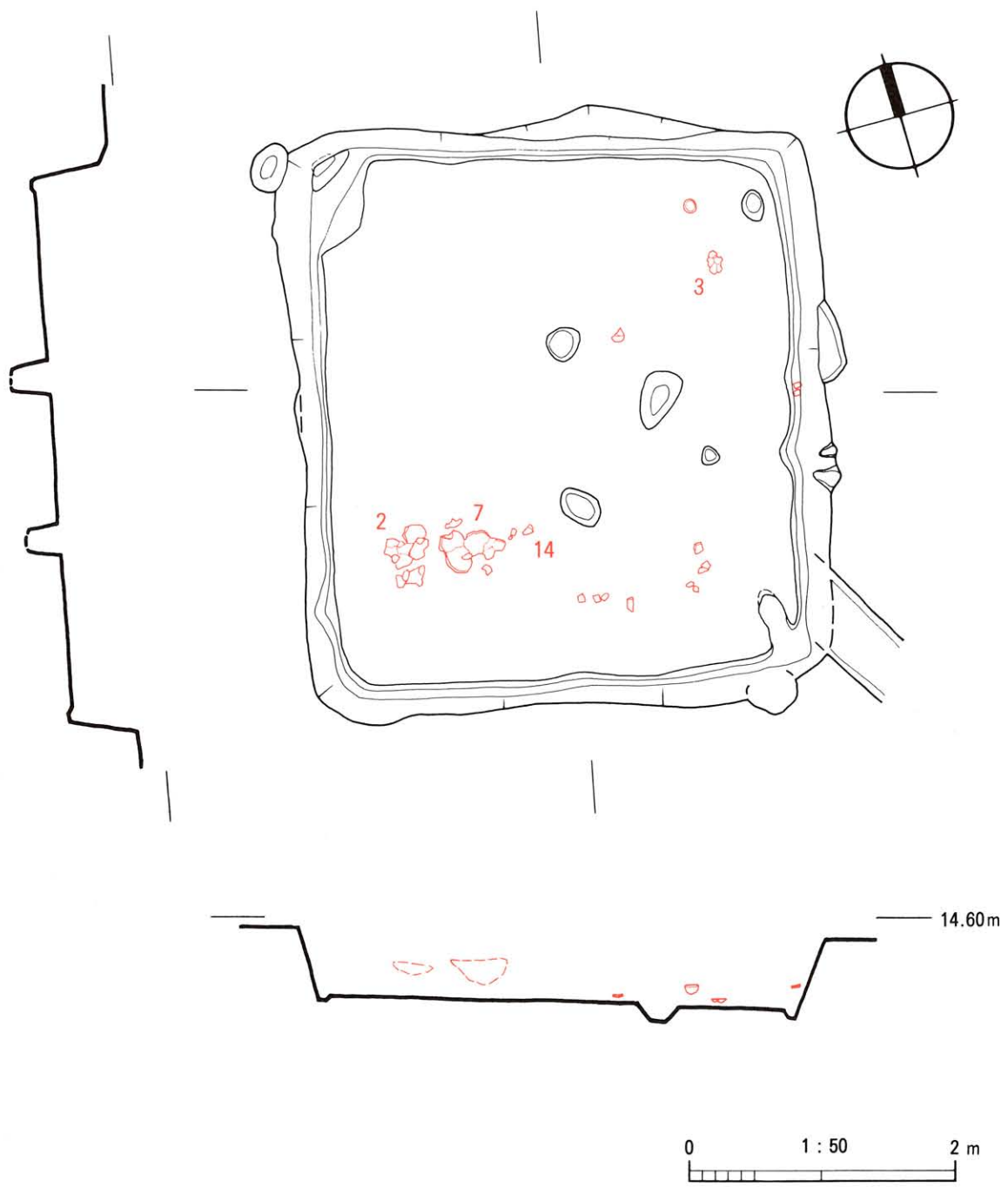
第45图 17号竖穴出土遺物(2)



18



第46図 17号竖穴出土遺物(3)



第47図 18号竖穴

18号竪穴

17号竪穴の南隣に位置する方形竪穴。平面規模は4.4m×4.0m、検出面から床面までの深さは比較的深く、50cm～60cmを測る。遺構主軸は約15°東偏する。

壁際には壁帯溝が巡る。その北東側コーナーと南西側コーナー付近は土坑状（深さ約15cm～20cm）となる。床面には支柱穴と見られる2基のPitがある。心々間の距離は1.2m。中央やや東寄りに炭化物の集積箇所がある。

他と同様、黒色土系の覆土で、北側から「アカホヤ」ブロック含有土が流れ込む様な状況を呈していた。壁帯溝中は「アカホヤ」パミスの含有率が高いため、茶色味が強くなる。

18号竪穴出土遺物

床面のやや上位から、まとまった個体が数多く出土している。2・7などの周囲には炭化物が見られる。

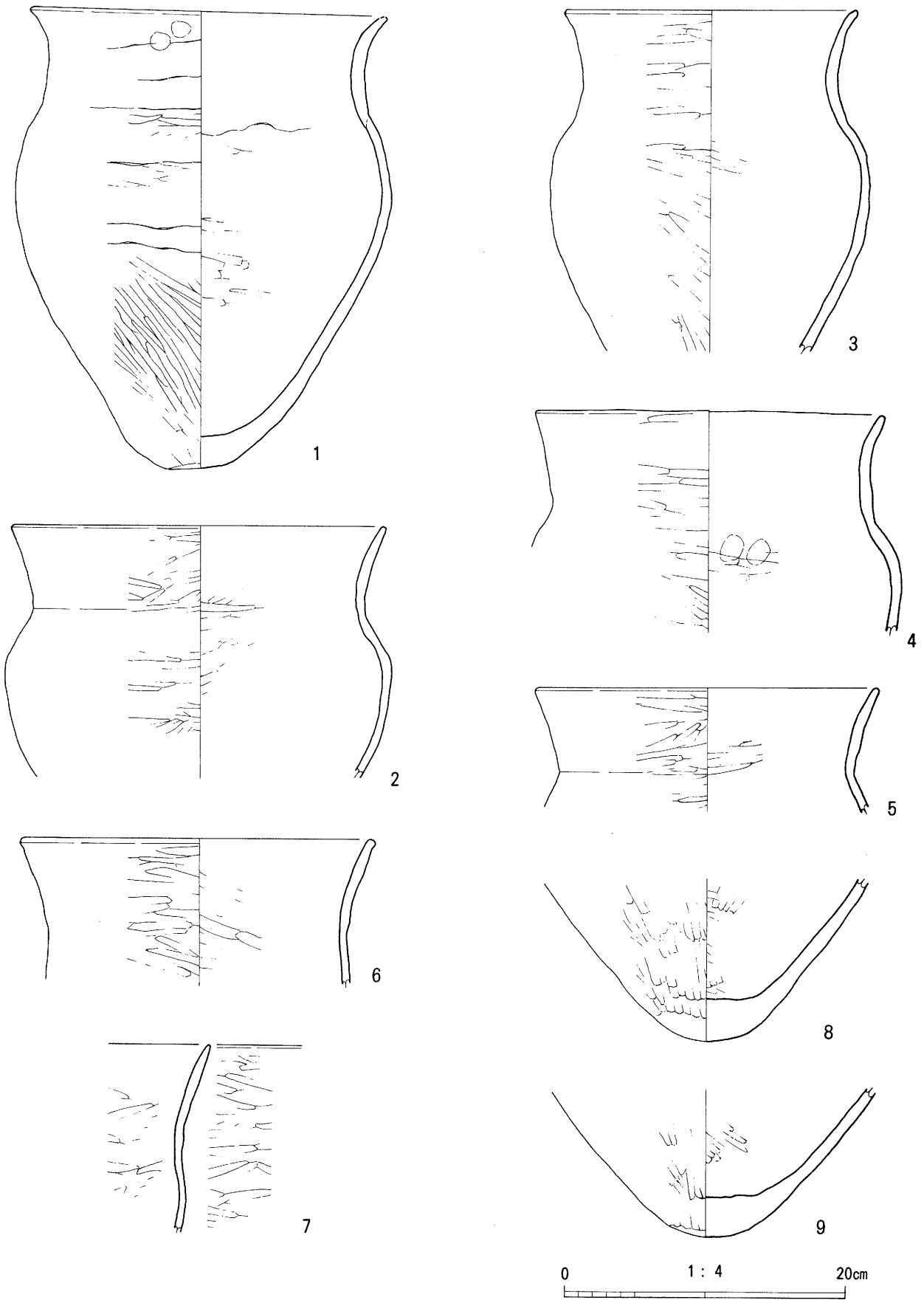
1～7は甕、8・9は甕の底部か。

10・11は椀。12は小型器種で、鉢か壺状を呈すると推測される。

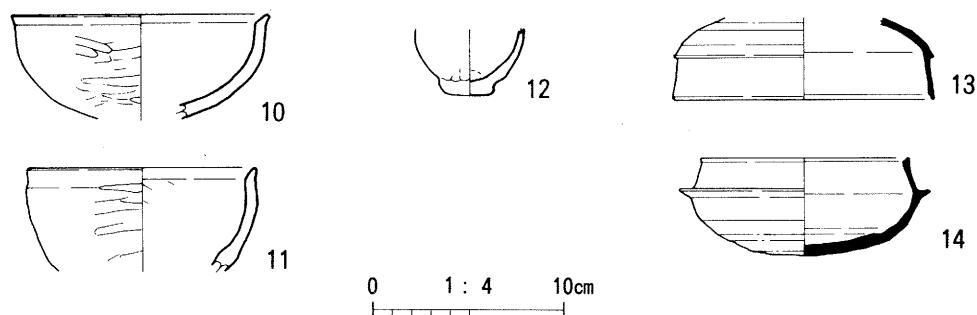
13・14は須恵器の蓋杯。体部半ばまで回転ヘラケズリが施される。14の回転ヘラケズリの方向は時計回りである。

1	甕 ミガキ状ナデ/ナデ 橙 スス付着2/3 (ただし口縁部は欠損部多い)	8	甕 ケズリ/ナデ 明赤褐 1/1
		9	甕 工具ナデ 橙/明赤褐 1/1
2	甕 ミガキ状ナデ/ナデ にぶい赤褐/にぶい橙 1/5	10	椀 ミガキ/ナデ 明赤褐 1/6
		11	椀 ミガキ/ナデ 明赤褐 10と同一である可能性あり
3	甕 ミガキ状ナデ/ナデ にぶい赤褐 1/6		
4	甕 ミガキ状ナデ/ナデ 明赤褐 1/1	12	小形鉢 丁寧なナデ 橙・黄灰 1/3
5	甕 ミガキ状ナデ/工具ナデ にぶい褐/にぶい黄橙 1/3 火熱を受ける	13	須恵器蓋杯 [蓋] 回転ナデ・回転ヘラケズリ 灰 1/4
6	甕 ミガキ状ナデ/ナデ 明赤褐/橙 1/8	14	須恵器蓋杯 [身] 回転ナデ・回転ヘラケズリ 灰・灰白 1/1
7	甕 ミガキ状ナデ/ナデ にぶい赤褐		

以上が、検出・掘り下げを行った竪穴の全てであるが、乙区南端の南東側の切り通しで竪穴らしき遺構の存在が確認されたため、飛び地状の調査区を設定し、1基の竪穴を検出した（19号竪穴）。掘り下げは行わなかったため、詳細な時期は不明であるが、古墳時代の竪穴と見て間違いのないようであり、該期の集落がそちら側に広がることが判明した。



第48図 18号竖穴出土遺物 (1)



第49図 18号竪穴出土遺物

G・H-3・4区柱穴群

Ⅲ層上面で黒褐色土埋土の柱穴群が検出された。深さは約20cm程度。確証はないが、南北棟の掘立柱建物跡（2×3間）であった可能性もある。その中央部には土坑がある。

付近より多くの遺物が出土している。出土レベルは、概ね検出面より10cm～20cm程上位を示す。

それらは一括資料とは認定できないが、5・6の高杯などで明らかなように、全体として竪穴の土器よりも古期に遡るようである。

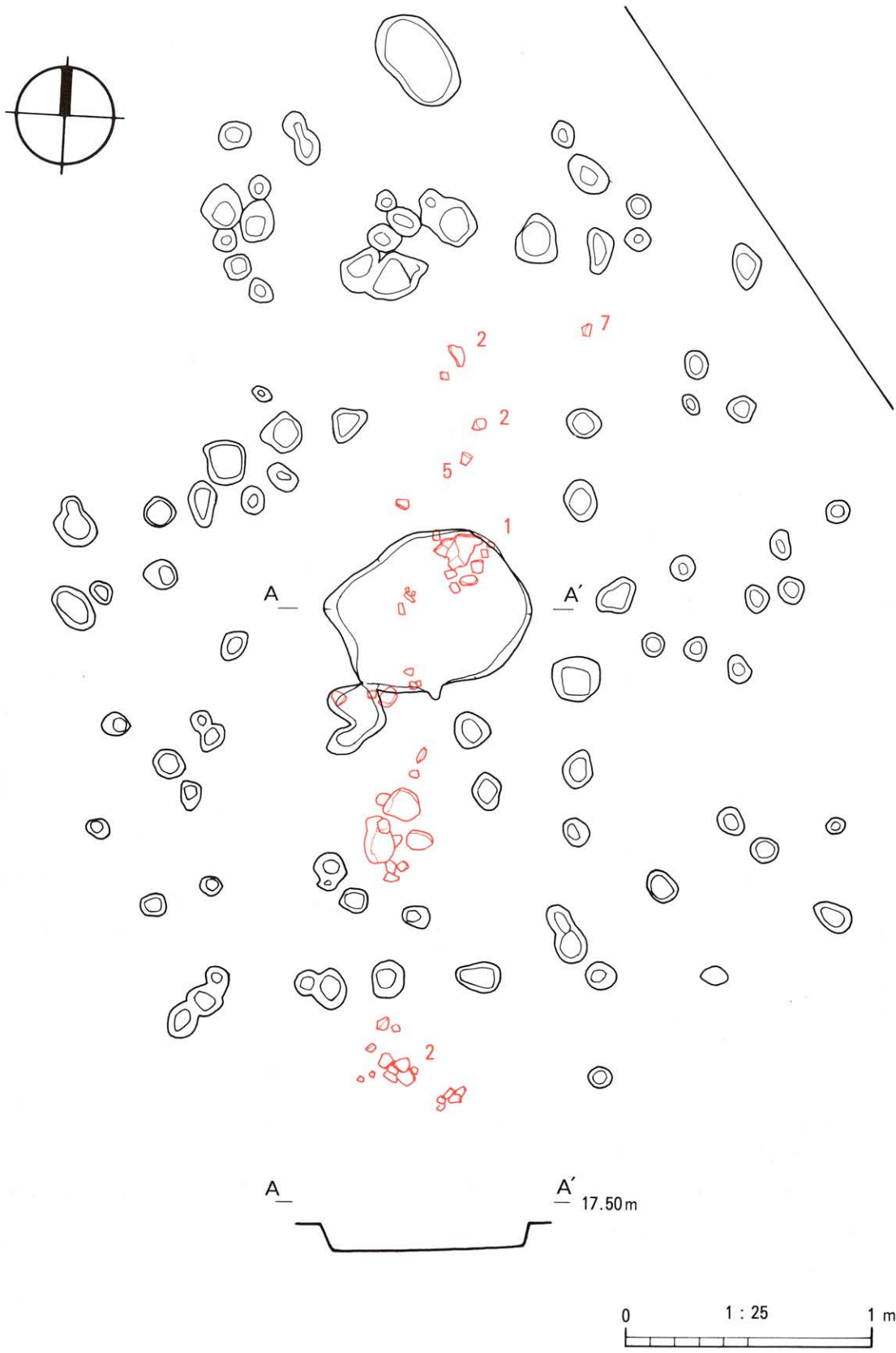
1	壺 ナデ にぶい黄橙／橙 1／6	5	高杯 ナデ 橙 1／4
2	壺 工具ナデ 明黄褐・橙／橙 1／5	6	高杯 工具ナデ・ナデ にぶい黄橙 1／1
3	壺 ナデ 浅黄橙 1／1	7	須恵器高杯 回転ナデ・回転ヘラケズリ灰／灰・暗灰黄 内面自然釉 1／3
4	甕 工具ナデ／ナデ 橙 1／1		

包含層出土遺物

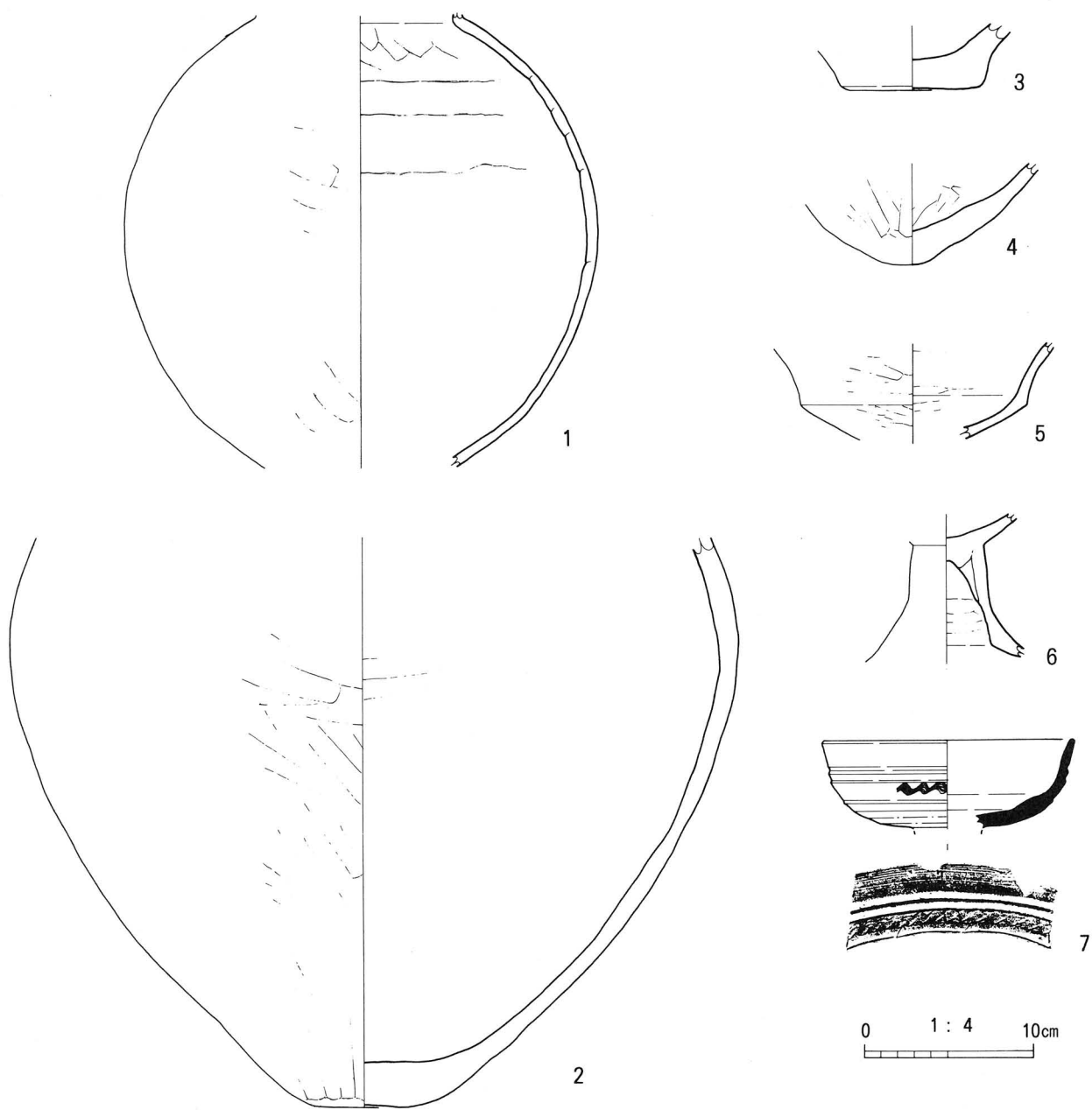
多量に上るため、ごく一部について図化し掲載している。

1は口縁部が鈍く「く」字形に屈曲する甕。外面の調整は粗い印象を与えている。2は丸底の無頸壺と考えられるが、口唇部が摩滅しており断定はできない。3・4は高杯。杯部外面の稜線は比較的明瞭である。

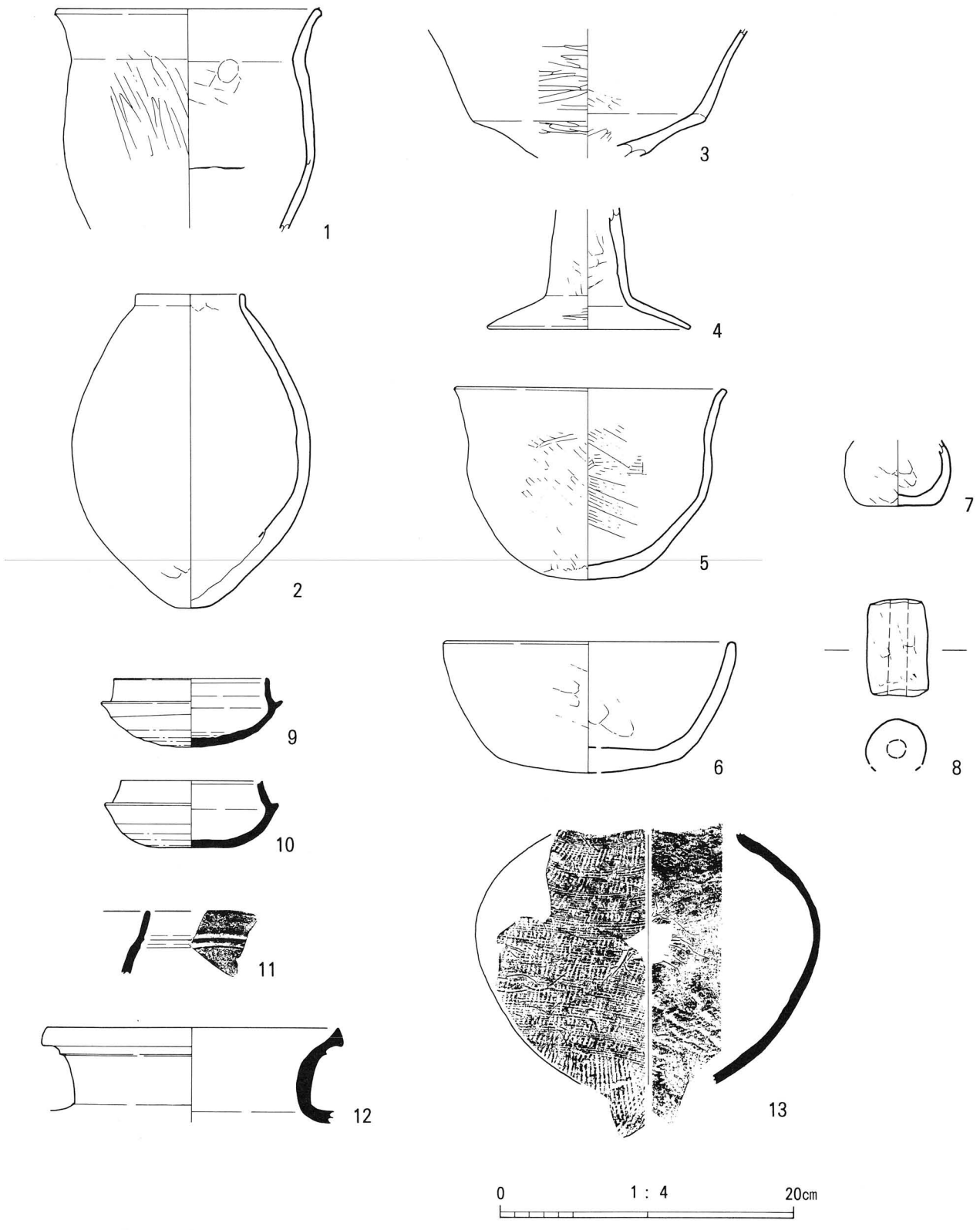
9・10は須恵器の杯身。9の回転ヘラケズリの方向は時計回りとなる。11は壺の口縁部で外面に波状文が施される。12・13は甕である。



第50图 G·H-3·4区柱穴群



第51图 G·H-3·4区柱穴群附近出土遗物



第52図 包含層出土遺物 (4)

1	甕 ケズリ状マデ／ナデ 橙・灰貴褐 ス ス付着 1/4	9	須恵器蓋杯 [杯] 回転ナデ・回転ヘラケズ リ 灰白 1/2 ヘラ記号
2	壺 ナデ 浅貴橙 1/2	10	須恵器蓋杯 [杯] 回転ナデ・回転ヘラケズ リ 黄杯 1/2
3	高杯 ミガキ／ナデ 橙／暗灰貴 1/2		
4	高杯 ナデ にぶい橙／浅貴橙 1/2 鉢	11	須恵器小形壺 回転ナデ 灰 櫛描波状文
5	ナデ／ハケ 明赤褐 1/3	12	須恵器甕 ナデ・カキ目 灰
6	椀 ナデ 橙 1/2	13	須恵器甕 カキ目・タタキ／ナデ・同心円 文 灰
7	小形壺? ナデ 明褐／橙 1/2		
8	重さ10.43 g		

第Ⅲ章 むすびにかえて

第1節 弥生時代に関して

本遺跡では、前期に属する遺物や中期末～後期初頭に属する遺構・遺物の存在が確認された。中期末～後期初頭の遺構群は、1基の花弁状住居（円形基調間仕切り住居）と方形住居（ベッド状遺構付き）、2基の小形竪穴、それにやや不確実な点はあるが数基の土坑という組成となっており、第Ⅱ章では、該期の1つの集落の単位そのもの、あるいはそれに近似する姿を示す可能性を指摘した。その仮説成立のための前提として、出土土器が弥生時代中期末～後期初頭に属するほぼ同時期の一群であるとの認定が欠かせない。その特徴は以下の通りである。

甕は直口をなし、口縁部やその直下に1条ないしは2条の刻目突帯を巡らせるものが主体をなす。広義の下城式であり、同一時期に属するものと見て良いと考えられる。ただし、下城式は豊後地方においては（小地域差はあるものの）中期後半には消滅するため、その「時間差」をどう捉えるかが問題点として残る。

壺は2号竪穴の小形壺（3）が目立つ以外、良好な資料を欠く。包含層出土の資料の中に弧状文らしき文様を施すものがあり、「下城式壺」の候補と言えようが、遺構出土資料の中にはなく、それが該期の壺であるとの確証はない。26号土坑出土の大形壺を見ると、突帯などに須玖式の影響が見られるようである。

また高杯の口縁部と見られる1号竪穴の27は、田崎博之氏による須玖式B6甕の口縁と同一形態となっている。B6甕は須玖Ⅱ式古段階の指標とされ¹⁾、これが年代観決定の根拠となっている。

ただし、26号土坑の1の甕は「く」字形口縁、上げ底を呈する甕で、やや後出する（後期以降）特徴を備えていると見られる。一方2・3の甕は、胴部が張るもので、古相を示すようにも見受けられる。即断は禁物であろうが、同資料は一括埋没と見て間違いなく、それらの型式差は時間差を示すのではなく、同一「期」に内包されるものではなかろうか。

上記の他、小破片ながら中期末～後期初頭の土器群と共伴した、いわゆる瀬戸内系凹線文土器の出土は重要な意味を持つ。

なお、花弁状住居²⁾は、大分県や愛媛県で類例が報告されているが、定型化されたものとしては北限の事例となる。また前述した年代観は、新富町新田原遺跡6号住居跡³⁾と近く、最古段階のものと位置付けられよう。

土坑の中には、26号土坑に見られるように、わずかであるが断面がフラスコ状となるものがある。機能については決定的証拠を欠くが、甕と壺という組み合わせから墓とは考え難く、貯蔵穴と考えておきたい。

第2節 古墳時代に関して

竪穴住居跡が12基確認された。ここでは以下の通りいくつかの方向から分類を行う。

まず遺構主軸について見ていくと、①ほぼ南北方向をとる一群（10・12・14・17・18号）、②約25°西偏する一群（8・15・11号）、③約45°振れる一群（7・13・16号）、に分けられ

る。ただし上記の中で、11号堅穴はややいびつな形であることから、より慎重になるべきかも知れない。また17号と18号は近接しており、同時期と見なすのはやや躊躇される。18号の主軸がやや東に振れることから微妙な時期差があったと見るべきか。

床面の構造については、①Ⅲ層（「アカホヤ」層）まで掘り込み、床面を形成するもので壁帯溝を有するもの（8・10・15・16・17・18号）と、②Ⅳ以下層まで掘り込み、「アカホヤ」ブロック等の混じった貼床を施すもの（7・11・13・14号）に大別できる。うち、15号はやや特異な床面の状況を呈する。

なお、構造の論議を行う場合、柱穴の位置等を基にせねばならないが、今回検出の堅穴では支柱穴のはっきりしないものが多いため、深く追求することができない。本来ならば、周辺のPitを含めた検討も必要であろう。

以上の分類を踏まえて出土遺物の検討を行い、時期比定を行いたいところであるが、ほとんどが覆土中よりの出土であり、「確実にその堅穴から出土した」と認定できる資料が少ない点が惜まれる。ここでは、いくつかの器種について変化の方向性を推測するにとどめたい。

甕は丸底で、口縁部がゆるやかに外反するものが数量的に多く、在地甕の基本型と言えよう。外面にミガキ状の調整を施すことも特徴の一つである。その変化は口縁部の外反の度合いに現れる。ほとんどがゆるやかに外反する形状を呈するが、13号堅穴の1や18号堅穴の6、あるいはやや不明瞭ながら7号堅穴の1などは外反の度合いが鈍くなる。後出の要素であろう。一方、包含層出土資料の1は、口縁部の屈曲線が明瞭で、外面の粗い工具ナデ調整も含め、古い様相を示すものと言えよう。

11号堅穴からは布留式模倣の甕が出土している⁴⁾。この布留式模倣甕が布留式新段階に並行するものと見ると、当資料群の上限の一点が定まる。

壺は不明瞭で、おそらく消滅する時期にあたるのでであろう。8号堅穴の8などは古い様相を示すものか。

須恵器について見てみると、蓋杯などは概ね陶邑編年のTK23ないしはTK47段階に相当すると考えられ、西暦500年前後の年代が与えられよう⁵⁾。おそらく下限の年代はその付近と推測される。

このように、土器を観察すると、少なくとも単一の様式に属するものではないようであり、古墳時代の当遺跡では少なくとも二時期にわたって集落が形成されていることが判明した。このことは、堅穴を遺構主軸と床面構造の両面から分析し、導き出された結果と合致する。ただし前述の通り、遺物の出土状況に起因する制約から、土器様式と堅穴の各グループとの対照は困難である。ここでは、「古段階」の代表として須恵器を含まない8号堅穴を、「新段階」の代表として13号堅穴出土土器を挙げておくにとどめ、機会をみて再考したい。

上記の他、今回の調査では、貝類の集積箇所など海浜に面した生活の一端を垣間見ることのできる資料を得ることができた。生業の変遷を追求する上で重要な意義を有するものと評価できよう。

(註)

- 1) 田崎博之 「九州系の土器からみた凹線文土器の時間位置」『日本における石器から鉄器の転換形態の研究』1998
- 2) 石川悦雄 「宮崎における弥生時代竪穴式住居の展開」『宮崎県史研究』5 1991
- 3) 石川悦雄編 『新田原遺跡』(新富町文化財調査報告書第4集) 1983 新富町教育委員会
- 4) この11号竪穴はややいびつな平面形を呈しているが、そのことと外来系土器の出土という現象とが何らかの関連性を有する可能性もあろう。
- 5) 田辺昭三 『須恵器大成』1981 角川書店

報告書抄録

書名	中野内遺跡	シリーズ名	北浦町文化財報告書第1集
遺跡所在地	宮崎県東臼杵郡北浦町大字古江字中野		
経度	東経 132°35'64"	緯度	北緯 32°42'30"
調査期間	92.07.13~92.1.18	調査原因	団体営土地改良事業
調査面積	10,360m ²	種別	集落跡
時代	弥生時代・古墳時代	主な遺構	竪穴住居跡・土坑
主な遺物	弥生土器・土師器・須恵器石器	特記事項	花卉状住居跡・貝類集積箇所



中野内遺跡全景（上空より）

図版 2



作業（遺構検出）状況（南より）



Ⅲ層以下層序



弥生時代遺構群付近
(上空より)



1号竖穴検出状況(南より)

図版 4



1号竖穴覆土の状況（北半）



同 上（南半）



1号竪穴（東より）



2号竪穴検出状況（南東より）

図版 6



2号竪穴覆土の状況



2号竪穴（東より）



3号竪穴出土遺物（南より）



3号竪穴（南より）



4号竖穴覆土・ベッド状遺構の状況（北東より）



4号竖穴（北東より）



5号竪穴（南西より）



26号土坑遺物出土状況（南より）



26号土坑（南より）



1～7号土坑群（西より）



6号竪穴（北より）



7号竪穴（南東より）



8号竪穴覆土・遺物出土状況（東より）



8号竪穴（東より）



9号竪穴（南より）



乙区北半10号～12号竪穴付近（北西より）



10号竪穴（東より）



10号竪穴（西より）



11号竪穴（西より）



11号竪穴（北より）



12号竖穴（東より）



12号竖穴 道路下拡張の状況（北西より）